転生魔王のジュリエット

久慈マサムネ

ファンタジア文庫

2938

CONTENTS

World End Juliet

プロローグ
【ハルト・シンドー】
006

プロローグ
【イリス・シルヴェーヌ】
008

第一幕
彼女を取るか、世界を取るか、それが問題だ
010

幕間
～少し時間をさかのぼり、ハルトとイリスの出逢いのお話～
075

第二幕
討伐競技会か、彼女と密会か、それが問題だ
097

幕間
141

第三幕
試験勉強か、彼女とおフロか、それが問題だ
145

第四幕
この気持ちは本物なのか、偽物なのか、それが問題だ
198

エピローグ
274

あとがき
283

口絵・本文イラスト　みやま零

遺跡より発掘されたグローヴ・ストーンの碑文は語る。

――かつて旧支配者あり。
それすなわち、この世界を支配せし魔族。
他の生きとし生けるもの、全て弱きものなり。
中でも人は極めて弱きもの。その使命は、労働と食料となる他なし。
その報酬は、絶望と恐怖なり。
魔族の繁栄と共に人も増えゆき、その数だけ悲劇が生まれるなり。
数多増え、消費される人の中に、剣を取る者あらわれ。
人と、神と、獣と、剣が魔族に反旗をひるがえすこと幾千回。
ブラッドウォールの戦いにて、ついに勝利を手にするなり。

魔族は北方へ去り、旧支配者はその身を二つに分かたれ、魂を奪われり。
それより後、地上は人の支配する土地となり。

――されど、
旧支配者は死なず。
二身、一つになりしとき、地上に降臨す。
後世の者に告ぐ。
全てを投げ打ち、復活を阻止すべし。
旧支配者にして魔王。

――ジュリエットの復活を。

プロローグ【ハルト・シンドー】

十一年前のことだ。
俺が五歳の頃、俺たち家族はアブソリュート帝国との国境近くに住んでいた。
父親が、国境を守るブレイズ共和国の兵士だったからだ。
国境を守るとはいえ、ちょっとした小競り合いがある程度で、平和な村だった。
父親は強くて、大きい人だった。顔よりも、広い背中を先に思い出す。
母親は元気が良くて笑い上戸。家の中はいつも明るい雰囲気にあふれていた。
だが、あの日。
俺が隣町までお使いに行って、戻って来たとき――、
村は凍り付いていた。
雪に白く染められた中に、真っ赤な血が流れていた。
家に駆け込むと、そこには冷たくなった父親と母親。
傍らに立つ帝国の兵士が、俺に向かって剣を振り上げる。

その瞬間――俺の中で、何かが目覚めた。
体から炎が噴き出し、帝国の氷を溶かす。
帝国兵を燃やし、家を、村を焼き払った。
忌まわしい記憶を消すように、俺から生まれた炎が村を消滅させた。
炎の中でたった一人。俺は、つぶやいた。
「俺は、許さない……帝国を」
その時、俺の中で、誰かが囁いた。

――探せ。そして手に入れろ、滅びの力を。

そいつは、俺に言った。
半身を探せ、と。
自分のもう半分。

――『魔王の半身』を。

プロローグ【イリス・シルヴェーヌ】

その日は、素敵な一日になるはずだった。
十一年前、私の五歳の誕生日。
離宮では盛大なパーティが開かれ、大勢の人たちが集まるらしい。従兄弟の優しいお兄さまが、私の為に色々計画してくれていた誕生パーティ。
胸を躍らせて、私は馬車に乗って城を出た。早く着かないかしら。空飛ぶ馬車なら良かったのに。そんなことを考えていると、伝令の早馬がやって来た。
離宮がブレイズ共和国に襲撃された。従兄弟のお兄さまも殺された。すぐに逃げろと。
しかし馬車が向きを変えている間に、私たちはブレイズの兵士に取り囲まれた。
護衛の従者もあっという間に殺され、私は馬車の外へ引き出された。
馬車も、荷物も、みんな燃やされ、辺りは火の海だった。
炎の中で、私は剣を突き付けられた。
その瞬間――私の中で、何かが目覚めた。

青空が灰色の雲に覆われ、雪が降り出した。
突如起こった凄まじい吹雪が、ブレイズの炎を消した。
ブレイズの兵士が凍り付き、無残な襲撃の跡を氷と雪が覆い隠す。
物音一つしない、白一色の雪景色。
その中で、私は一人、つぶやいた。
「許しません……ブレイズ」
その時、私の中で、誰かが囁いた。

――探せ。そして手に入れろ、滅びの力を。

それは、私に言った。
半身を探せ、と。
自分のもう半分。

――『魔王の半身』を。

第一幕　彼女を取るか、世界を取るか、それが問題だ

半円形の大教室が真っ二つに割れていた。
黒板に向かって右側にはアブソリュート帝国、左側にはブレイズ共和国の生徒が座っている――いや、立ち上がっている。
それぞれ約三十名。双方が今にも抜刀、或いは魔法で攻撃しようと身構えていた。
一触即発の、張り詰めた緊張感。
ブレイズの生徒の一人――鮮烈な赤い髪をした男子が口火を切る。
「どうした帝国のお姫様。お前ら貴族はお高くとまっていやがるが、てめえ一人じゃ何もできねえ。結局俺たちに頼らなきゃ、北方魔族を防ぐこともできねーんだろうが」
ふてぶてしい表情に、鋭く、好戦的な目つき。
格調の高い制服を、だらしなく着崩している。
ブレイズ共和国の筆頭魔術師、ハルト・シンドーは両手をズボンのポケットに突っ込んだまま顎を上げ、相手を見下すような目で睨んだ。

その視線の先にいるのは、超絶的な美しさを誇る少女。
――イリス・シルヴェーヌ。
アブソリュート帝国の第一王女であり、王位継承者。正真正銘のお姫様である。
光り輝く銀色の髪に、青い瞳。その姿は、氷の妖精かと見紛うばかりの美しさ。ピンク色の艶やかな唇が開き、鈴のような声が奏でられる。
「貴族は優れた血統を持っているわ。知能も、魔力も、全てにおいて。優秀な者が能力の劣る者を導くことに、何の不思議があるの？」
「はっ、よく言うぜ。よくそこまで自画自賛できたもんだ」
「人には能力に合った役目というものがあるわ。貴様たちブレイズ共和国のように、公平ばかりを優先すると、無能な者が指導者となる悲劇が起きる。それは国民を死地へ追いやる愚行に他ならない」
「その言葉、そのまま返すぜ。貴族なんざ、世襲にあぐらをかいているだけだ。大抵の奴は無能だろ」
その言葉に、イリスではなく他のアブソリュートの生徒たちが顔色を変えた。
「何だと!?　礼節も弁えぬ平民どもが！」
「北方魔族の脅威さえなければ、ブレイズなど即刻攻め滅ぼしてやるものを！」

「汚らわしい下等民族め！　この学院から出て行け!!」
そんな罵詈雑言を、ハルトはせせら笑う。
「しかも取り巻きの貴族さまは、口だけで腰抜けときてる。この俺を殺す度胸もねえなら、でけー顔すんじゃねえよ」
「面白い！　その品のない顔、叩っ斬ってやる!!」
アブソリュートの生徒たちが、一斉に剣を抜いた。
それでもハルトは煽るような態度をやめない。手もポケットに突っ込んだままだ。
仮にも相手はこの学院で学ぶ魔術師。自国で、剣と魔法の才を認められた者たちばかりだ。ハルトの態度は無謀にも程がある。
一人の生徒が前に出て、剣の切っ先をハルトの顔に近付ける。
「どうした!?　貴様こそなぜ剣を抜かん!?　臆したか！」
それでも尚、ハルトには余裕があった。
その程度では、決して後れを取らないという、己の力に対する絶大な自信。それが相手を圧倒した。
「ごたくはいい。さっさとやれよ。だが、てめえが剣を向けているのは、ブレイズの筆頭魔術師であることを忘れんなよ？　初撃をハズしたら……死ぬぜ？」

「く……この平民が！」
そう言いながらも、じりっと後ずさる。
それを見て、ハルトの背後に並ぶブレイズの生徒たちが笑い声を上げる。
「おいおい、どーした！　そのへっぴり腰は！」
「これだから温室育ちのお坊ちゃんはな！　ひゃはははははは！」
「何ならアブソリュート帝国をぶっ倒して、その勢いで北方魔族を討伐したっていいんだぜぇ！　コラァ!!」
そんなやり取りを、困った顔で聞いているのは講師のエルリック・エラン先生。黒板の前で、一人取り残されたように佇んでいた。
「あー君たち？　今は一応、授業中なんだけどな……」
しかし誰も聞いていない。
金髪の爽やか系イケメン教師の頬に、汗がたらりと流れる。
「あー……言うまでもないが、今世界は滅亡の危機に瀕している。北方より現れた魔族の群れ――北方魔族が大陸を侵略しつつある。これと同じ事が、大昔にあったのはみんなも知っての通りだ」
生徒の反応は全くないが、エルリック先生は健気に続けた。

「――魔王復活の前兆」

イリスとハルトの顔がぴくっと動いた。

「今も国境付近では、大勢の人間が魔族に殺されている。いや、内陸部でも魔族の大発生が度々起こっている。これはまさに、魔王が復活しようとしている兆しだ。だから、人間同士が争っているときじゃない。それこそが、このグランマギア魔法魔術学院が設立された理由。分かるだろ？」

それは正論だった。

確かにそのような理由で、この学院は今年設立された。魔族と戦う魔術師を養成する、という目的のために。

それまで紛争を繰り返してきたアブソリュート帝国とブレイズ共和国だが、一時停戦を取り決めた。その結果、大陸を統治する四カ国全ての協力体制が整い、ようやくこの春、一期生であるハルトたちが入学したのだった。

だがそれまで、血で血を洗う戦いを繰り広げていたブレイズとアブソリュートである。

同じ屋根の下で、平和に勉強など出来るはずもなかった。

ましてや帝国の皇女であるイリスが、面と向かってこれだけ罵倒されているのである。

アブソリュートとしては、黙って剣を収めるわけにもいかない。

イリスは腰の退けたアブソリュートの生徒を見つめ、

「下がりなさい」

と冷たく告げると、代わりに自分が前に出た。

ブレイズの生徒たちが静まり返る。

イリスの噂を知らぬ者はない。

たった一人で百人からのブレイズの騎士団を全滅させた、北方魔族に奪われた要塞を、わずか一時間で奪回した――など、その武勇伝はもはや伝説である。

しかしハルトだけは、不敵な笑みを浮かべている。

「何だ、お姫様がじきじきに相手をしようってのか？　光栄すぎて苦笑いするしかねえな」

教室の気温がぐっと下がり、イリスの周りにキラキラと光るものが煌めいた。

イリスの放つ冷気が、空気中の水分を凍らせている。

「なめるなハルト・シンドー。アブソリュートの王位は強さの証。強くなければ、頂点には立てないわ。アブソリュートの筆頭魔術師であるこの私に、貴様如きが勝てると思っているの？」

「……ふん」

ハルトはポケットから両手を出した。

その右手には、剣の柄が握られている。そのまま手を引き上げると、するするとポケットから赤い刀身の剣が姿を現した。

炎を象った剣――銘は『フェニックス』。

ハルトの愛刀であり、相棒。炎の魔法に特化した魔剣である。

そんな長いものが、ズボンのポケットなどに到底しまえるはずがない。しかし、魔術式を織り込んだ制服は、その不条理を可能にする。

イリスもまた、上着のポケットから、しまえるはずのない剣を引き抜いた。

それはハルトと対照的な青い剣。

氷の結晶のように、華麗な姿をした魔剣。銘を『ストレプトペリア』。

薄く透き通る刀身には金色の魔術文字が輝き、イリスのまとう冷気が一段と強くなる。

空気中に煌めく氷に対抗するように、ハルトの周りに火の粉が散った。ブレイズの炎の魔術の影響か、空気中に炎が走る。

「いくぞ！　帝国の姫君!!」

「来るがいい！　平民の剣!!」

二人が一瞬で間合いを詰める――瞬間、

「いい加減にしたまえ！『リストレイン』!!」

エルリック先生の拘束魔法『リストレイン』が発動していた。
「なっ!?」
「あっ!?」
どこからともなく現れた紐が、二人の両腕に絡みつく。
「落ち着きなさい！　ここは教室ですよ。さあ離れて――」
引き離される――と、教室の全員が思った。
が、その逆だった。
「うわぁああっ!?」
「きゃあぅっ!?」
紐はお互いを引き寄せた。
「むぐ……ぅっ!?」
しかも位置が悪いことに、ハルトの顔はイリスの胸に押し付けられた。
言い換えると、
イリスの豊かなおっぱいの谷間に、顔をうずめた。
そして魔術文字の浮かぶ紐は、ハルトとイリスの体をまるで一つの荷物のように縛り上げる。

ハルトの手は、イリスのお尻を掴むように固定された。
「ひっ!?」
背筋を駆け上がるぞくっとする感覚に、イリスは思わず小さく悲鳴を上げた。
さらにイリスの足が、ハルトの股の間に割り込むような形になる。イリスの太ももに、自分には存在しない未知の物体の感触が伝わった。
「こ、これ……きゃあっ!?」
もつれ合い、ハルトが下敷きになって床に倒れる。イリスの体重がかかった分、顔を包み込むような圧迫感が強まった。
や、柔らけえ!?　し、しかも、いい匂いが……。
自分の置かれた状況すら忘れさせる、男をダメにするクッションだった。
だが息が出来ない。
紐を引きちぎれないかと、手を動かしたが、イリスのお尻を揉んだだけだった。
「ひ……だ、だめ……」
囁くような声を漏らすが、イリスも理性を失いそうだった。
や、やだ……みんなが見てるのに……き、気持ちいい……♡　あぁ、もうどうなっても……♡

誘惑に引きずり落とされそうな意識を、女子生徒の怒鳴り声が引き留めた。
「何をするのだ、エルリック教諭!!」
叫んだのは、なぜかメイド服を着ている生徒。
フランセット・バラデュール――イリス付きのメイド兼お目付役で、アブソリュートの副長を務める少女だ。
幼い頃からイリスの侍女として育った彼女は、イリスへの思いは人一倍強い。エルリック先生を親の敵を見るような目で睨む。
「爽やか系かと思わせて、実はとんだ変態教師だったとは!! さては勇者ギルドの一員というのも、真っ赤なウソだったのだな!?」
「な、何を言うんだフランセット君!? 違うよ! れっきとした勇者ギルドの一員だって! 僕の身元は学長が保証してくれるから! 変態じゃないから!」
「いいから、早く魔法を解かないか!!」
「そ、そうだった!!」
エルリック先生が、慌てて解除の呪文を唱えると、二人を縛っていた紐が消え去った。
「大丈夫ですか!? 姫様!」
イリスをハルトから引き剝がすように抱き寄せると、フランセットはケガがないかイリスの体に視線を這わす。微かに赤らんだ頬以外、特に変化はない。

「外見は問題ないようですが……姫様、ご気分はいかがですか?」
「え、ええ。大丈夫……問題ないわ」
イリスはいつもの氷の表情を取り戻した。
「本当ですか? どこかお体に異常は? 気分が優れないとか?」
「だから平気よ。心配性ね、フランセットは」
立ち上がると、微かに口元を緩めた。
「しかし姫様、男にまったく免疫のない姫様が、その豊満な乳房に顔をうずめられ、あまつさえお尻を無残にも揉みしだかれたのです。きっと心に大きな傷を負われたのではと、フランセットは心配でございます」
「だ、だから平気よ……あまり思い出させないで、フランセット」
一度引きかけた頬の赤味が、再び戻ってくる。
「でも姫様の大きなおっぱいが、あの憎きハルト・シンドーの顔の形に歪められ、むにゅむにゅと形を変える様を見せ付けられたのですから、心配せずにはいられないのです」
「も、もう十分よ、フランセット。お願いだから、やめて頂戴」
フランセットは心なしか息も荒くなり、目つきも変わってきた。

「それに、お尻に食い込む男の指！　姫様のお尻の肉の柔らかさを表すようでした！　その感触を貪るように、もみもみと！　ああ、ふわふわとした柔らかさと、指を押し返す弾力を堪能していたに相違ありません！　変態の毒牙にかかった姫様の体は――」

「もうやめてフランセット!!　あなたの方がよっぽど変態よ!!」

顔を真っ赤にしたイリスは、ついに耐えきれずに怒鳴りつけた。

そんな二人に、エルリック先生は後ろ頭をかきながら謝った。

「本当にすまない。まさかこんなことになるなんて……」

「いえ……先生が故意にあのようなことをするはずありませんから。もうこの件は忘れましょう」

そう言われて、エルリック先生もほっとしたように肩から力を抜いた。

「いや、本当に申し訳ない。でも、おっかしいなあ……この拘束魔法は魔族相手に何百回とやって失敗したことなんてないのに……」

「いえ、無理もないと思います……」

「え？」

イリスは、しまったというように指先で唇を押さえた。

「あ、いえ……その、ウィザードも呪文を噛むという諺もありますし、どんな熟練の魔術

師でも、失敗することはあると……」

「そう言ってもらえると救われるよ。ハルトくんもすまなか――」

ハルトはブレイズの男子生徒に取り囲まれていた。

「まったく。うちの筆頭は見境がなくて困りますね」

ふわりとした茶髪にアンダーリムのメガネをかけた優男が、親しげに微笑む。

「るせぇぞ、クロード。テメーも見てただろうが。事故だ」

「分かっています。しかし、もっと気を付けてくれませんか？　前後の状況を敢えて無視して、帝国の姫と絡み合っていた……という部分だけ抜き取って、伝えられてしまう可能性もあるんです」

ハルトと違って、襟の一番上までホックをはめ、びしっと制服を着こなしている。理知的で落ち着いた物腰は、ブレイズでありながら、どこか貴族的な雰囲気がある。

それがブレイズの副長にして参謀、クロード・コノエ。

ハルトが最も信頼する友人であり、懐刀。

「クロード、何が言いたいんだよ？」

「ハルトとアブソリュートの姫君が恋仲だなんて噂が広まったら大変だ――ってことですよ。とんだスキャンダルです」

「――っ！」
ハルトは思いっきり顔をしかめた。
「……気味の悪いこと言うんじゃねえ。それより俺の尻拭いがお前の仕事だろ？　ちゃんとこいつらに口止めしとけよ」
と、取り囲むブレイズの生徒を見回した。するとその一人が、
「いやいや、俺たちがそんなデマ言いふらすワケねーけどよ、ハルト……その代わり訊きてえことが」
「あ？」
ハルトは不機嫌そうに眉を寄せる。
「……どんな感触だったんだよ？　ロイヤルおっぱい」
「なっ!?」
堰を切ったように、他の男子がハルトに詰め寄った。
「そうだ！　柔らかかったか!?　硬いのか？　どうなんだよ!?」
「やっぱ姫のおっぱいって、すげえフカフカなのか!?」
「いや、俺はむしろケツの触り心地を知りたいね！」
「お、お前ら！　ふざけんな。触り心地なんて――」

ハルトは感触を思い出すかのように、自分の指を見つめ――、
「そりゃ……お前……こう――うっ!?」
頬を赤らめたイリスに、じっとりした目で見つめられているのに気付いた。
ハルトは手を隠すように、腕組みをする。
「そ、そんなの知らねえよ！　別に触りたくて、触ったワケじゃねーしな!!」
にやけた笑いを浮かべる男子とは対照的に、ブレイズの女子生徒はイリスに明らかな敵意を向けていた。
「何なの、あの女？」
「うちのハルトにハニートラップでも仕掛けるつもりなのかしら？」
「アブソリュートの冷血女が、ハルトに色目なんか使って……マジ許せない」
すかさずフランセットが言い返す。
「無礼な！　そちらの男どもこそ姫様に懸想しているのであろう!?　姫様は貴様らのような貧弱な肉体とは違い、美の結晶だ！　不埒な劣情を催したのではないか!?」
「やっぱハルトを誘惑してんじゃん!!　それと貧弱な体ってなによ!?」
論点もめちゃくちゃで、罵りあう生徒たちも、何を言い争っているのか分からなくなっていた。ただ、相手を罵倒することが目的となっている。

「あーっ!!　ったく、てめーらいい加減にしやがれ!!」
ハルトが大声を出した。
「俺があんな女に惑わされるワケねーだろーが！　これっぽっちも興味ねーし、興奮もしねーよ！」
イリスの氷のような表情に変わりはない。が、少し目が鋭くなった。
「私とて、貴様のような山猿の相手をするほど、慈善家ではない」
「んだと？」
ハルトは再び前に出て、イリスを睨みつける。
しかしイリスも一歩も引かずに、睨み返した。
「北方魔族と戦う気がないのであれば、まずはブレイズを占領し、強制的に従わせてもいいのよ？」
「面白え。出来んのかよ、テメーに」
二人の視線が火花を散らす。
エルリック先生は頭を抱えて、さじを投げるようにつぶやいた。
「もう……僕の手には負えないよ、まったく……」
そして生徒たちの間に、再び殺気が満ちる。

イリスの上目遣いの青い瞳が、ハルトをじっと見据えた。
「北方魔族と、戦う準備は出来ているのか？　ハルト・シンドー」
その問いに――ハルトは何かに気付いたようにハッとする。慌てたように、ブレイズの仲間を振り返った
「警戒しろ、お前ら！　北方魔族が来るぞ!!」
突然のことに、ブレイズの生徒たちは、ぽかんとした顔でハルトを見つめた。
「は？　何言ってんだよハルト。ここは中央だぜ？　四カ国が隣接する、大陸のど真ん中だぞ？　北の国境じゃないんだぜ？」
地響きがした。
ゴゴゴという地鳴りと共に、微かに床から震動が伝わってくる。
「くそ！　来やがったか!?」
ハルトが警戒するように周囲を見回したとき、廊下側の壁が吹き飛んだ。
――!?
「きゃぁあああああ!?」
「うおおっ!?」
巻き込まれた生徒が床に倒れ、一瞬遅れて悲鳴が上がる。

そして、壁を突き破って教室に入ってきたモノを見て、二度目の悲鳴が上がる。
「テ……北方魔族!?」
一見、それは人に見える。しかし、全身の肌は青緑色。黒目はなく、むき出した歯は肉食獣の如き牙。頭には棘のようなツノ。体は人間より大きく、全身の筋肉が異常に発達している。
――危険レベル5のオーガ。
北方に近い森では、オーガに喰われた人間の残骸が、度々見つかる。
そこそこ知能があり、危険な北方魔族であると子供の頃から教えられている。生徒たちの脳裏に、無残に食い散らされた人間の姿が蘇る。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
女子の悲鳴が響き、教室はパニックに陥った。
優秀な生徒たちではあるが、実戦経験はない。突如現れた北方魔族の姿に、我を見失うのも無理はなかった。
「ど、どこから!?　何で学院の教室にっ!?」
エルリック先生ですら、突然のことに頭が回らないのか、対処が出来ない。うわずった声で叫ぶだけだった。

さらに悪いことに、オーガは一匹ではなかった。
続けてもう二匹、扉を破って教室に入ってきた。
これで廊下側はオーガに封じられ、逃げ場はない。唯一あるとすれば、窓から飛び降りるしかない。
しかし、ここは四階。物質移動の魔法『ムーブメント』が使えない生徒は、死を覚悟する必要がある。
オーガに喰われるか、転落して死ぬか――そんな選択が、生徒を絶望の底に叩き込む。
――が、
死の香りのする教室で、落ち着き払った生徒が二人。
「……何だ、オーガか」
ハルトは拍子抜けしたようにつぶやくと、肩に剣を担いで、オーガに向かって無防備に歩いて行く。
ここに来て、やっとエルリック先生が冷静さを取り戻した。
「いけない！　僕が対処するから、下がっ――」
エルリック先生が拘束魔法を放とうとしたのと、オーガがハルトに襲いかかったのは同時だった。人間を遥かに超える脚力が、一瞬でオーガの体をハルトの目の前まで飛ばす。

「『フレイム』！」
炎が一閃した。
ハルトは何気なく、無造作に剣を振ったように見えた。
剣の軌跡を炎が描く。
次の瞬間には、オーガが真っ二つになっていた。
死体は宙を舞い、炎に包まれると一瞬で灰になる。
骨格が炭となって残るが、それも床に落ちると粉々になった。
残る二匹のうち一匹が、さらにハルトに襲いかかる。
剣が赤く輝き、火の粉を上げる。
――フレイム。
それは炎の魔法。
ブレイズが最も得意とする炎系の魔法だ。
威力としては弱いが、長い呪文は必要なく、発動しやすい。剣に魔法を宿らせることにより、斬った瞬間に炎の魔法を直接叩き込む。
ハルトが軽く剣を振ると、先程より激しい炎が剣の軌跡を描く。
オーガもハルトが強敵であると認識した。

真っ直ぐ飛びかかるのではなく、わずかなフェイントを挟み、床を蹴る。先程のオーガよりも素早い。鋭いツメが、ハルトを斬り裂いた。
そう思われた。
だが、ハルトはその一撃を難なくかわし、剣を振り抜いていた。
飛びかかったオーガの体が、着地する前に、二つに分かれる。
胴体の辺りで、上下に切り離されていた。
二つになった体は炎に包まれながら、床を転がる。
断末魔の叫び声を上げる間もなかった。死体は炭となり、骨も残らない。
あと一匹。
残ったオーガは三匹の中で一番大きく、屈強だった。そいつが、イリスに襲いかかる。
イリスもまた、剣に指先を当てた。
「『フロスト』」
それはフレイムの氷バージョンのようなものだ。
イリスの剣、ストレプトペリアが青く輝き、白い氷の結晶を散らす。
アブソリュートは氷系の魔法を得意とする。剣は極低温となり、空気の温度を下げ白い煙と光る粒を生み出す。

襲いかかるオーガを、イリスは踊るように優雅な動きでかわした。ここから反撃に移るのか、と思った時には――、

既にオーガを斬っていた。

オーガの体が凍り付いてゆく。足から腰、胸、腕、頭と凍り付き、動きが止まり、息の根が止まる。

イリスは静かにオーガの氷像に近付くと、剣の先で、軽く突いた。

氷の彫像と化したオーガが、崩れ落ちた。最早、オーガだったことも分からない。残ったのは、ただの砕いた氷の山。

生徒たちは息を詰めて、一連の流れを見つめていた。

そして数秒の後、

静まり返った教室に、割れんばかりの拍手と歓声が響いた。

「すっげえぞハルトぉおお!! さすがブレイズの筆頭魔術師!! 最強だぜぇ!!」

「イリスさまぁあああああ! まさに氷の妖精! 素晴らし過ぎますぅうう!!」

興奮した生徒たちが叫びまくっていて、何を言っているのか聞き取れないほどだった。

「ハルトくん! イリスさん! 大丈夫かい!?」

エルリック先生は駆け寄ると、二人の体を心配そうに見つめた。

「大丈夫って……何がだ?」

剣をポケットに収めながらハルトが聞き返すと、エルリック先生は呆れたように肩をすぼめた。

「いや、訊く必要もないね……申し訳ない。本来、僕が対応しなきゃいけなかったのに」

イリスは剣をしまうと、首を横に振った。

「突然のことですから。驚かれるのも無理ありません」

「うん……それなのに、君たち二人は冷静で、本当に凄いね。やはり国を背負って立つ筆頭魔術師だけのことはあるよ。それに、今の二人の連携を見て、この学院の設立が間違っていなかったことも確信したよ」

「何だと?」

ジロリと睨むハルトに、

「だって、見事な連携だったじゃないか。お互いの息もピッタリで」

「はぁ!? どこがだよ! 息なんか、全然合っちゃいねえよ! それに筆頭魔術師を一緒くたにすんな! あいつは、身分で手に入れたんだろーが! 俺は実力で手に入れたんだよ!!」

イリスも不機嫌そうに顔を曇らせる。

「先生、不快なことをおっしゃらないで下さい。ブレイズなどと同列に扱われること自体が、我々への侮辱です」
「え……あの」
冷や汗を流し、エルリック先生が後ずさると、今度はハルトとイリスが睨み合う。
「教室で炎を使うなんて、放火魔なの？　思慮が浅すぎる。そんなことでは民を守るどころか、関係のない人々を巻き込むことになるわ」
「は？　負け惜しみ言ってんじゃねーよ。俺が倒したのは二匹、お前は一匹。俺はお前の倍、強えってことだろーが」
「私が倒した奴が一番大きかった。ザコの露払いご苦労様。そういう意味では、少しは私の役に立ったわね。嬉しい？」
「て……テメェぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
ハルトは再び剣の柄に手をかけ、イリスもまた抜刀しかける。
「まあまあ！　とにかく君たちのおかげで学院が守られたんだ。教師陣を代表して、お礼を言うよ！」
エルリック先生は引きつった笑いを浮かべながら、二人の間に割って入った。
「それより、なんでオーガが現れたのか調べないと！　さ、みんな廊下に出て！　調査を

始めるよ！」
イリスは頭に付けた髪飾りに触れてから、指先に髪の毛をくるくるっと巻き付け、さらりと払った。
「ハルト・シンドー、貴様など二十一回、時計塔の上から落としても飽き足らないわ。その顔、一生見ずに済めばどれだけ幸せか」
「……面白え。お前が嫌がることなら、やってやるよ。このツラまた拝ませてやるから、覚悟しておけ」
「だからもうケンカはやめてって!!　お願いだから!!」
エルリック先生に泣き付かれ、二人はふんと顔を背けたまま教室を出た。
その後――校舎周りを調べた結果、地面を掘り返したような跡があり、ここからオーガが現れたことは間違いないと断定された。
確かに、オークやオーガは土の中から発生することが確認されている。
しかし、学院の敷地から現れた例はない。
北方魔族の襲来、そして魔王の復活が現実のものとして近付いて来ている。教師も生徒も、その事実を肌で感じていた。

○　○　○

グランマギア魔法魔術学院は全寮制である。
寮の建物は一つではなく、国ごとに分かれている。これは、無駄な争いが起きないように、との配慮からだ。
夕食が終わると、消灯時間まではそれぞれが自由な時間を過ごす。
ブレイズ共和国の寮では、広間に全員が集まっていた。全員と言っても、三十名しかいない。今年の生徒は一期生のため、上級生も下級生もいないからである。
「いやーでも、今日のオーガは驚いたよな」
「ホントよね。でも、ハルトが倒してくれて助かったわ」
ハルトはみんなの輪から離れ、壁際の三人掛けソファに横になっている。
「しかし、いつまでもハルト頼みというわけにはゆきません。全員がレベルアップをして、ブレイズが最強であることを示す必要があります」
こういうとき、話を仕切るのは副長であるクロードだ。
クロードはメガネの奥にある優しそうなまなざしで、抜け目なく全員を観察していた。

「この学院は、ブレイズ共和国、アブソリュート帝国、ルミナス教国、ホライズン王国による四カ国連合への試金石。ここでの力関係が、連合軍の力関係になると言っても過言ではありません」
「なによソレ……あたしら、結構責任重大じゃん」
「その通りです。だから他国――特にアブソリュートを叩き潰す必要があります。そして、僕たちにはその力がある。そうですよね？　ハルト」
話を振られたハルトは、面倒臭そうに起き上がると、みんなのところへやって来た。
「ったりめーだ。最初は他の国と同じ学院なんぞ、冗談じゃねえと思っていたが、いい機会だ」
不敵に笑って、ブレイズの生徒たちを見回す。
「いいかお前ら！　ブレイズは最強だ！　アブソリュートに、ルミナスに、ホライズンに、俺たちが大陸の覇者ってことを見せつけてやんぞ！」
ハルトの一言で、全員のテンションが跳ね上がる。
「うおおおおおおおおお!!　やったるぜぇえええ！」
「あたしもやるわ！　筆頭!!」
「俺たちの先祖が奴らにされてきたことを、倍にして返してやろうぜ！」

みんなが盛り上がる様を見て、クロードは改めて確信した。
やはり、ハルトは人の上に立つべき人間だ。
チームとして、四カ国の中で一番になるのも重要だが、それ以上に大切なことがある。
それは、筆頭魔術師であるハルトが、学院最強であること。
筆頭魔術師は国の代表であり看板だ。
その最強が、他の国の筆頭に負けるわけにはいかない。ましてや、アブソリュートに後れを取るなど、あってはならないことだ。
――僕が、
絶対にハルトを勝たせてみせる。
クロードがそんなことを考えている間に、ハルトはみんなに背を向け、広間から出て行こうとしていた。
「どこへ行くのですか？　ハルト」
「――なんか、眠くてな。フロ入って寝るわ。ジャマすんじゃねーぞ、お前ら」
「おう、はえーなハルト」
「今日は大活躍だったから、疲れたんでしょ。おやすみ、ハルト」
他の生徒たちの挨拶に送られ、ハルトは広間を出た。

暗い階段を自分の部屋に向かう。
闇の中を歩きながら、ハルトの瞳は決意に光っていた。
「……悪いな。クロード」
そう、ぽつりと漏らした。

○　○　○

夜空に大きな月が輝いていた。
月の光が湖面をきらめかせ、水の都――グランディアを浮かび上がらせている。
その中心にあるのが、グランマギア魔法魔術学院。
元は広い湖に浮かぶ小さな島だった。数百年前に大きな教会が建てられ、それを取り囲むように町が発展した。
ここはちょうど四カ国が隣接する唯一の場所。
交通、交易の要衝であり、多くの人が集まり、あっという間に手狭になった。人々は湖に杭を打ち、その上に人工の大地を作って町を拡張することにした。
今では元の島の、何倍もの大きさに成長し、大陸でも有数の都市となった。

その最初のきっかけとなった教会が、グランマギア魔法魔術学院として使われている。広い敷地に、いかにも古い教会らしい、凝った装飾の校舎が幾つも並ぶ。

その中で一際目を引くのが、シンボルとも言える時計塔だ。

グランディアで一番高い建物であり、四方に大きな時計の文字盤が付いていて、島のどこからでも見ることが出来る。

時計の針が指すのは、二十一時。

その時計塔の最上階に――部屋で寝ているはずのハルトがいた。

腕を組み、壁にもたれて窓から外を覗いている。

ハルトがいるのはちょうど時計の内部に当たる部屋。四方の壁には、巨大な文字盤が光っている。特殊な鉱石で作られているので、文字盤自体が発光しているのだ。だから、明かりがなくても部屋の中はうっすら明るい。

ぼんやりした明かりの中で、巨大な歯車が規則正しく動いている。部屋の中は、時計を動かす為の機構でぎっしりだ。

そして頭上には大きな鐘。この鐘が鳴る回数でも、時刻を確認することが出来る。

但し、寮の門限を知らせる二十時以降は、朝まで鳴ることはない。

その門限の時刻も、とうに過ぎている。

故に、他の生徒は誰もいないし、誰かが来ることもない。

そのはずである。

にもかかわらず、

「そこにいるのは、ハルト・シンドー？」

――一人の少女が現れた。

「ああ」

「誰もいないと思って考え事をしに来てみれば……まったく、最悪だわ」

「そうだな誰もいない」

ハルトは壁から離れ、ゆらりと一歩、イリスに近付いた。その目に、手に、全身に緊張がみなぎっている。

「……本当に……二人っきり？」

「姿を隠していたり、潜んでいる奴がいないかも調べた。盗み聞きするような魔法や魔術具がないかも確認した」

「……そう」

イリスが足を踏み出し、

徐々に小走りになり、

そして加速、
一気に襲いかかるように――、
「ハルトくん♡」
愛しい人の胸に飛び込んだ。
「お、おい、イリス」
ハルトは飛び込んで来たイリスの頭頂部を見おろした。そして、背中に手を回していいものかどうか戸惑い、中途半端な姿勢で固まった。
イリスの大胆な行動に、ハルトの方が押され気味である。
「ちゃんと合図に気付いてくれたんですね……嬉しい」
昼間別れ際にイリスがした仕草。
――頭に付けた髪飾りに触れてから、指先に髪の毛を巻き付け、払う。
それが合図。
そしてその後に、落ち合う場所と時間を指定する。

『ハルト・シンドー、貴様など二十一回、時計塔の上から落としても飽き足らないわ。その顔、一生見ずに済めばどれだけ幸せか』
この場合、二十一という数字が時間の指定。その後の時計塔が場所の指定である。
それに対するハルトの返事は、
『……面白え。お前が嫌がることなら、やってやるよ。このツラまた拝ませてやるから、覚悟しておけ』
すなわち、OK。会いに行く――という意味だ。
そして愛しい彼女が来るのを、ハルトはここでそわそわしながら待っていた。
もうすぐ会えるという期待、トラブルがあって来られないのではという不安、見つかるのではないかという恐怖、そして二人っきりという緊張。
それらを乗り越え、やっと二人っきりで会えたのだ。得も言われぬ喜びがある。
ハルトはそっと、イリスの腰に手を回した。
腕の中に収まった恋人の体は、頼りないほどに細く、しなやかで、背中に手を回して抱きとめているだけでも、至極の快楽をハルトにもたらした。
しかし――、
片手でイリスの体を抱きながら、ハルトはもう片手でポケットから剣を抜く。

二人は宿敵同士。
大陸の覇者、アブソリュート帝国の姫君にして筆頭魔術師、イリス・シルヴェーヌ。
もう一方の雄、ブレイズ共和国の筆頭魔術師、ハルト・シンドー。
絶対に相容れないこの二人が、実は恋人同士だと誰が信じるだろうか？
だが、知られれば大陸最大のスキャンダル。
二人の未来はない。
故に、この関係を誰にも知られるわけにはいかない。
ハルトは剣を振り上げ、その切っ先を冷徹に振り下ろす。
イリスの背後に迫っていた、巨大なコウモリが真っ二つになった。
レベル2のムルシエラゴ――大きさは普通のコウモリの三倍から五倍。人や動物を襲う肉食の北方魔族だ。
イリスとの接触が夜だと、よく現れる。そのムルシエラゴは、短い断末魔の声を上げて灰となった。
ハルトがムルシエラゴを倒したのに気付くと、イリスは急に我に返ったように、
「あ……っ⁉　私ったら、つい……っ！」
頬を染めて、恥ずかしそうにハルトから離れる。

「はしたなくて……ごめんなさい」
消え入りそうな声で、そうつぶやいた。両手の指先をからませてもじもじする姿が、また可愛らしい。
「い、いや。気にすんなよ、そんなの」
少し恥ずかしくなり、ハルトもついぶっきらぼうな口調で返してしまう。
ハルトの剣からわずかに散る、ムルシエラゴの残骸を見て、イリスは不安そうに顔を曇らせた。
「……やっぱり、私たちがお付き合いをするのは、難しいのですね」
悲しそうに目を伏せる。
「ちょ……待てよ」
ハルトがイリスに向かって手を伸ばすと、その手から逃れるように、イリスは優雅な身のこなしで後ろへ下がる。
「私はアブソリュート。ハルトくんはブレイズ……それだけでも、一緒にはなれないわ」
「ああ。しかもイリスはお姫様ときてる。それに引き換え、俺はただの学生だ」
貴族が支配者層として君臨するアブソリュート帝国と違い、ブレイズ共和国には身分制度がない。

元々ブレイズはアブソリュートに帰属していたという過去もある。アブソリュートにしてみれば、ブレイズは平民の住む一地方に過ぎないのだ。

今は事実上の独立国となっているが、アブソリュートとしては面白くない。そのため、両国の間では争いが絶えない。

「ハルトくんはただの学生じゃないわ。ブレイズの筆頭魔術師じゃない」

「剣と魔法の腕が立つってだけだ。それでイリスとの仲を認めさせることなんて、出来やしねえ」

「そうですね……それに、もっと厄介な問題もありますし」

「……」

敵国同士。

お互いが、それぞれの国の筆頭魔術師。

さらに、国を継ぐべき姫君と一国民。

もうこれだけで障害としては十分すぎる。

だが、まだある。

極めつけの問題が、二人の前に――いや、全世界の前に立ちふさがっている。

ハルトはイリスの手を掴んだ。

「だめっ……ハルトくん。そんなことしたら――」

二人の周りに、ぽうっと光の玉が現れる。

光の魔物、ウィル・オー・ウィスプ。

危険レベル1で脅威はそれほどではない。しかし光の魔物なので、至る所に出現する。

ハルトはほぼ無意識に、剣を振るった。

叫び声も上げず、ぼんやり光る橙色の球体が、真っ二つになって消滅した。

「……やっぱり、私たちは呪われている」

イリスはそっと手を添え、ハルトの手を自分の腕から離させる。

「……イリス」

「魔王が復活する予兆を感じて……北方魔族が喜んでいるんだわ」

降ってくる火の粉と灰を見つめ、イリスは深刻な表情を浮かべた。

「この身に宿った、『魔王の半身』の呪い――転生婚礼の成就に」

「……」

否定しようのない事実に、ハルトは言葉もない。

それは真実である。
ハルトとイリス、二人の体には魔王の半身が潜んでいる。
それは古の魔導書に『ジュリエット』と記載されている魔王の半分。
魔王はその存在を分割し、人間の中に隠れている。
そして、復活の時を待っているのだ。
復活の方法とは何か？
それは半分に分かれた体が、一つに合体することである。
つまり――、
「いつになっても、俺はイリスとは――」
「ええ……えっちは最後までは出来ないですね……」
残念そうに、ほうっ……と溜め息を吐くイリス。
「……」
予想外に積極的な発言に、ハルトは思わず黙ってしまった。こんな超絶美少女の口から、そんな言葉が出てくるだけで、頭がくらくらするほど興奮する。
一方イリスは、その沈黙の意味にハッと気付くと、
「えっ!?　そ、そういう意味じゃなかったんですか？」

真っ赤になってうろたえた。
「やだ、もう……はしたなくて……ごめんなさい」
頬を押さえてうつむくイリスに、ハルトは慌ててフォローを入れる。
「い、いや、俺の方こそすまん」
「それに、ハルトくんの気持ちもありますものね。私の体なんか、そんなに魅力的じゃないかも知れませんし……」
「魅力的に決まってるだろ」
えっ、とイリスは顔を上げると、うるんだ瞳でハルトを見つめ、
「……うれしい」
と、蚊の鳴くような声でつぶやいた。
あまりの可憐さに、ハルトは頭をぶん殴られたような衝撃を受けた。
抱きしめたい。
今すぐに。
そんな衝動を、ハルトはぐっと抑えた。
迂闊な行動は控えなければならない。
なぜなら、

——世界の破滅は、二人がHするかどうかにかかっている。

魔王の復活。

それは、全人類の滅亡を意味する。

神話の時代の遺跡といわれているグローヴ・ストーンの碑文には、

——全てを投げ打ち、復活を阻止すべし。

と書かれている。

そして、その後の時代の古文書でも、

——魔王を復活させてはならない。

——ひとたび復活すれば、全ての生きとし生けるものは屍となり、世界は崩壊する。

と、何度も書かれており、過去数千年の人類の歴史は、いかに魔王の復活を防ぐかの戦いでもあったことが分かる。

正しい歴史か、伝説かは不明だが、過去に一度魔王が復活したことがあると言われている。その時には、完全に目覚める前に倒すことが出来たそうだ。

尤も、全人類の半分以上が死滅した、との恐ろしい記述もあるが。

そして、こうも書かれている。

——魔王が復活する前には、必ず魔族が大量発生する。

実際、ハルトとイリスが抱き合うなど、Hの予兆的なことをすると、魔族が発生する。

ハルトとイリスが触れ合うことを魔王復活の予兆と捉えているのか、魔族が喜びに沸き立っているのだ。

「世界を崩壊させるか、救うか——と言えば聞こえはいいが……やることがHするか、しないかっていうのがな……」

問題の深刻さと、その実体のギャップが激しすぎる。

「そ、そうですね……私たちのお付き合いに、世界の命運がかかっているだなんて……それがなければ、今頃はもっと——」

「ん？」

「いっ!?　いえ！　何でもありませんっ」

イリスは恥ずかしそうに、目をそらした。

「と、とにかく……あまりイチャイチャし過ぎると、危険です」

「ああ。その分だけ、世界が崩壊に近付く」

とはいえ、彼女とどのタイミングでHしたらいい？　みたいな話で世界の運命が決まる

というのも、どうかと思う。

しかし事実として、ハルトとイリスが学院に入学してから、北方からの魔族の侵略が一段と激化した。北方魔族も、魔王の復活を感じ取っているのだ。

だから、イリスとイチャイチャしてはいけない。そう思っているのだが――、

「分かってはいるが、俺たちの中の魔王の半身が、お互いを引き寄せる。本能みたいなもんだ。ガマンしようと思っても、なかなか難しい」

「だからといって、普通のカップルのようにベタベタするわけにはいきません！　私たちがイチャイチャすると、それだけ世界が破滅に――」

「だったら何で、さっき抱きついてきたんだよ……」

「うっ！　そ、それは……」

イリスは言い訳に困った。

「ハルトくんの顔を見たら、うれしくて……何だかガマンが出来なくなっちゃって……気付いたら、飛びついていたの……」

「……っ!!」

そんなことを言われたら、嬉しいに決まっている。今度はハルトの方が、イリスに抱きつきたくなる衝動と戦う番だった。

「それは……俺だってそうだ。だが、それが『魔王の半身』の呪い、転生婚礼の罠なんだ」

――転生婚礼。

それは魔王の呪い。

魔王の半身は、宿主であるハルトとイリスを内側から刺激し、Hしたくなるように仕向けている。

その呪いの威力は凄まじく、時には二人を催淫状態にまで陥れる。

突然やって来る発情期のようなものだ。

さらに驚くべきことに、転生婚礼は物理的な現象にも干渉する。

奇跡的な偶然を引き起こし、二人にHなアクシデントを起こさせるのだ。

実際、今日も――、

「今日のエルリック先生の拘束魔法……あれが失敗したのも、転生婚礼のせいですね」

「……だろうな。転生婚礼は不条理なまでの偶然を作り出すからな」

「でしたら……やはり私とハルトくんは、もう会わない方が――」

イリスの言葉をさえぎるように、ハルトは言った。

「それが何だってんだ」
「え？　ですから、転生婚礼から逃れ、世界を救う為には、私たちが別れるしか……」
イリスの瞳に涙が溜まってゆく。
「ふざけんな!!」
突然叫んだハルトに、イリスの体がびくっと跳ねる。
「なんで俺たちが、世界の犠牲になんなきゃいけねーんだ！」
「で、でも……」
「俺は今まで諦めたことはねえ。逃げたこともねえ。そんな下らねー運命に負けてたまるかよ！」
「……でも、どうするの？」
「そんなもん、イリスとずっと一緒にいる。そして世界も破滅させねえ。俺とイリスが生きる世界をぶっ壊してたまるか！」
「……どうやって？」
「それはこれから考える!!」
「それ……本当に出来ると思ってるの？」
そう問いかけるイリスの瞳は、救いを探している。

ハルトは不敵に笑った。
「楽勝だ」
「ふふふ……」
「何だよ？　何が可笑しいんだ？」
「ううん。言ってることムチャクチャだけど……なんか、本当に何とかなりそうな気がしてきちゃった」
そう言いながら、イリスは指先で涙を拭いた。
「もう。面白いこと言うから、泣くほど笑っちゃったじゃない」
満面の笑み。
普段の学院では決して見ることの出来ない、イリスの笑顔。
氷のような顔の下には、こんな素の表情がある。
それを知ったことが、ハルトがイリスを好きになった理由の一つでもある。
お互い、一目惚れだった。
最初はその気持ちに戸惑うばかりだった。
しかし、二人きりで敵と戦う機会があり、お互いの中にある魔王の半身の存在を知った。
それからだ。

腹を割って話をして、お互いのことをよく知るようになったのは。
それから、次々と意外な一面が明らかになっていった。
お姫様なのに、身分に関係なく人を評価すること。
嘘や人を騙すことが大嫌いなこと。
兵士が戦死すると、隠れて涙を流していること。
寮に入るのは城から長期間出る初めての経験で、前夜は楽しみで眠れなかったこと。
甘い物が大好きなこと。
一度、自分で服を選んでみたいと思ってること。
普通の女の子のように、買い物をしてみたいこと。
氷のような表情は表向きで、本当は表情豊かなこと。
冷たい態度は威厳を保つためで、本当は優しいこと。
キリがない。
一目惚れは、恋だったのか、転生婚礼のせいだったのか、ハルト本人には分からない。
だが、そんなものは今となってはどうでもいい。
今、イリスを好きな気持ちは本物だからだ。
「ハルトくん……そろそろ戻らないと」

壁の時計を見上げ、少し寂しそうにイリスがつぶやく。
内側から見るので逆になっているが、時計の針は二十二時を指そうとしていた。
そろそろ見回りが来る。
見つかると、色々と面倒なことになる。束の間の逢瀬も、終わりの時間だ。
「……そうだな」
ハルトは戸締まりをしようと窓の側へ行った。
窓の取っ手に手をかけたとき――突然、突風が吹き込んできた。
「きゃ……っ！」
「イリス？」
慌てたようなイリスの声に、ハルトは振り返る。
「っ!?」
イリスのスカートが大きくまくれ上がっていた。
「だっ、だめっ！　見ちゃ……」
イリスは慌てて前屈みになり、スカートを両手で押さえる。
結果、お尻を後ろへ突き出す格好になった。
その背後には、時計を動かす歯車。

その歯車に、イリスのお尻を包む最高級の下着が挟まった。肌には食い込まず、薄い生地だけをついばむように巻き込む、奇跡的なタイミング。

「ひゃっ!?」

イリスの下半身が引っ張られる。

「おい!?」

ハルトは床を蹴ってイリスのもとへ駆け寄ると、イリスの両手を掴んだ。

「引っ張るぞ！」

「ま、待って」

イリスは切羽詰まった表情でハルトを見つめた。

「どうした!?」

歯車の力は強く、イリスの体が引っ張られる。

「ぬ、脱げちゃう……」

「言ってる場合かぁあ!!」

ハルトは力一杯イリスの腕を引いた。

イリスの太ももを白い布が滑り、つま先からすっぽ抜けるのが見えた。

「うわっ!?」

急にイリスの体が軽くなり、ハルトは勢い余って後ろへ倒れる。

「きゃぁああ!?」

そして半分放り投げられた形で、イリスはハルトの胸に馬乗りになった。

「……っ!?!!」

ハルトの目の前十数センチ先に、イリスの下半身。

スカートの下には何もない。

可愛らしいおへそと、驚くほど白い下腹部が見えた。

そして――、

視線を下げるより先に、ふわりとスカートが降りて来て、秘密の舞台は幕を下ろした。

「は……は、はる……」

耳まで真っ赤になったイリスが、小刻みに震えていた。

ハルトはこの瞬間、

――ああ、世界がまた一歩、破滅へ近付いた。

と思った。

このような奇跡的な偶然、いわゆるラッキースケベを魔王の半身は引き起こす。

典型的な、転生婚礼だ。

きっとどこかで、強大な魔族が目を覚ましていることだろう。
――でも、俺のせいじゃねえ。
これもみんな『魔王の半身』の呪い、転生婚礼が悪い。
「なっ!?　何をしているのです!?」
突然、幼い少女の声が響いた。
くそっ!?　見つかった!!
金色に光る錫杖を掲げた少女が、俺たちを見おろしていた。
この学院の生徒にしては、やけに小柄な体。
金髪にウサギの耳のような黄色いリボン。
白のワンピースのような制服。
ルミナス教国の筆頭魔術師――クララ・シュトラール。
小柄なのも当然で、クララは十二歳。
学院の入学資格は十五歳なのだが、クララは特別に入学を認められたのである。それだけ、能力がズバ抜けているという証拠だ。
ハルトは心の中で舌打ちした。
こいつが今晩の見回りだったのか。また、面倒な奴が……。

「あ、あなた方は、ブレイズのハルトさんと、アブソリュートのイリスさんっ!?　こんな夜遅くに……こんな場所で、なんて淫らなことをしているのです!?　か、神の罰が降り注ぎますよっ！」

正視していられないとばかりに、クララは顔を背け、手に持っている十字形の錫杖を、悪魔よ退散とばかりにぶんぶん振った。

「ち、違うぞクララ！　俺たちは殺し合っているところだ!!」

今さらながらハルトとイリスは抜刀し、剣の刃をお互いの首筋に当てる。

「へ……？」

クララはおそるおそる二人の方へ瞳を向けた。

「なあんだ。そうだったのです？　だったら問題な――」

微笑みかけた顔が、再び困惑の表情へ変わる。

「問題大ありなのです!!　早く剣を収めて、立つのです！」

イリスはスカートの裾を気にしながら立ち上がり、ハルトも出来るだけイリスのスカートの内側を見ないようにして、起き上がった。

立ってみると、クララを見おろす形になる。

しかしクララは、いかにも「怒ってます」とばかりに腰に手を当て、ぷんすか顔を披露

した。

「もう消灯が近い時間なのに、こんなところで決闘なんてダメなのです！」

いつもなら、もう少しイリスといがみ合う芝居をするところである。だが、今は差し迫った問題もある。

イリスがノーパンなこととか。

ここは素直に従うことにしよう――そうハルトは判断した。

「ああ、分かったよ。今日のところは、クララの顔を立てて俺も引こう」

「ふん……もう少しでとどめを刺せたものを……」

と、クールにキメながら、スカートの裾をしっかり握っているイリス。

また窓から風が吹き込むのではないかと、気が気ではないようだ。

「とにかく、俺たちは帰るぞ」

「待つのです。こんな夜遅くに出歩く不良さんのお二人には、ルミナスの経典からありがたいお話をお聞かせするのです」

クララは杖を抱えたまま、両手の指を組み合わせて、天使のような微笑みを浮かべた。

「い、いや……俺は遠慮しておく」

「う……私も」

「そう言わないで、聞いて下さいなのです。きっと心が浄化された気分になって、ケンカなどしなくなるのです。明日は学内にある聖堂をご案内するのです」
クララはルミナス教国の筆頭魔術師であり、聖人とも、光の天使とも謳われている。身も心もルミナス教に捧げており、教皇も一目置いているという。
それ故なのか、隙あらば布教しようとする。
「いや……だからな」
「明後日には、入信の手続きをするのです」
ゆるふわ系のキャラのはずが、布教のときだけは妙に押しが強い。
「さあ、共に祈りましょう……ルークス」
ルークスとはルミナスの祈りの言葉で、『光』を意味するらしい。
クララの布教攻勢にハルトはうんざりだったが、今のイリスはさらに窮地に追いやられている。
なにせ、はいていないのだ。
ノーパンである。
しかも制服は割とミニスカート。
風が吹いたら、一発で死ねる。

「と、とにかく、私は帰らせてもらうわ」
「あ、待って下さいなのです！」
背中に投げかけられる声を無視し、階段への扉を開こうとした。が、もう少しで取っ手に手が届く、というとき――扉が勝手に開いた。
「じゃーんっ！　アデリーナちゃんが逃がしませんよ！」
「なっ!?」
扉が開き、にぎやかな少女が飛び込んで来た。
ピンク色のツインテールに、満面の笑み。
そして巨乳。
はだけた上着は、胸が収まりきらないからか？　と疑いたくなる。
ホライズン王国の筆頭魔術師、アデリーナ・アースランド。
ハルトは心の中で天を仰いだ。
くそっ！　さらに面倒な奴が!!
四カ国の筆頭魔術師が揃い踏みである。
グランマギア魔法魔術学院は、この四カ国により設立された学院である。その代表たる四人が、なぜか夜遅くに、こんな場所で鉢合わせるのも奇妙な話であった。

「何をしに来た？　アデリーナ」
「おっとハルトさん。実はですねー、さっき下で落とし物を拾ったんですよー」
と言って、手に持っている物を見せた。
「……う!?」
「……っ!!!!」
イリスのパンツだった。
「あたしが拾ったときは、まだ温かかったんですねー。ですから、きっと脱ぎたてだと思うんですー」
そう言いながら、アデリーナはイリスのパンツであやとりをするように、びろーんと広げて、みんなに見せつける。
イリスは唇を噛んで、肩をふるわせていた。
……何で!?
何で私が、こんな辱めを受けなければいけないの!?
「あれ？　どうしたんですかイリスさん？　具合でも悪いんですかー？」
「い、いえ……た、他人の下着なんか見せつけられて、不快なだけよ……」
そ、そうよ。

大丈夫。
あの下着が私のものだってバレなければ！
クララは頬を赤くして、アデリーナが広げる下着を見つめた。
「ぬ、脱ぎたて……な、なんで、そんなものが……」
「ふっ、ふっ、ふっ、アデリーナちゃんの推理によれば、きっとこの時計塔にパンツを落として困っている人がいるに違いないんです！」
「ひっ、非常識なのです！　ハレンチなのです！　神罰が下るのです!!」
真っ赤になったクララは、興奮したようにまくしたてた。
「きっと不純異性交遊なのです！　えっちしてるのです！　子作りをしてるのです！　汚らわしいっ！」
「お、おい、クララ？」
目をぐるぐる回しながらも、興奮してまくしたてるクララに、ハルトは圧倒された。
「これはアレなのです。きっと特殊なぷれい、というものをしてるに違いないのです！　下着をはかずに人前に出て興奮するという変態なのです！」
なぜそんなプレイを知っている!?　お前聖女じゃなかったのか!?
と、ツッコみたい気持ちを抑えるハルト。

一方イリスは、先程からのクララの一言一言に、ぐさぐさと胸を抉られていた。
「どーしたんですかー？　イリスさん？　なんか涙目ですけどー」
「なんでも……ない……わっ！」
「そうですかー？　具合が悪くて何か必要だったら、言って下さいね！　お薬とか、おやつとか、色々持ち歩いてますから！」
実際、アデリーナは上着のポケットから、薬の瓶や、クッキーの箱などを次々と出しては見せた。
どうやらイリスの挙動不審な点には、あまり疑問を抱いてないようだ。ハルトは密かに胸をなで下ろした。
「そんなことより、これは変態な事態なのですっ！　神聖なる学院に、大変が紛れ込んだのです！」
アデリーナは、にっこり笑ってクララの方に向き直った。
「あははは、落ち着いてークララちゃん。逆ですよー」
「落ち着いていられないのですっ！　すぐに悪魔祓いを始めないといけないのです！」
「いやいやクララちゃん。そう考えるのは早計だと思うんだなー。これは、事故の可能性もあるのだ！」

「え……どういうことですか？」
きょとんとするクララに、アデリーナはドヤ顔で胸を反らす。おかげで大きなおっぱいが、ぷるんと上下に弾んだ。
「きっと時計の歯車かなんかに下着を挟まれたんじゃないかな!?　それでやむを得ずパンツを脱いで難を逃れたに違いない！　名探偵アデリーナちゃんはそう考えたんだな！」
アホかお前は！
と、ツッコみたい気持ちでいっぱいのハルトだったが、それが真相なので何も言えなかった。
クララは目を輝かせ、
「名推理なのです！」
と褒め称えた。
ハルトは困惑した。
これがグランマギア魔法魔術学院を構成する四カ国、それぞれの頂点たる筆頭魔術師たちなのか？
紛れもなく、ただのアホだ。アホの集団だ。
思わず頭を抱えたくなった。

しかし、アホとしか思えない推理が真実なのだから、悩みも二倍だ。
「とゅーわけでー……パンツちぇーっく!!」
「「は!?」」
「さ、みんなパンツ見せて？」
「……って、さも当然のように言うな!!　なに考えてんだよ、てめぇ!!」
アデリーナは人差し指を立てると、顔の前でちっちっと揺らした。
「きっとこの中に、パンツの持ち主がいるに違いないと思うんだなー。なので、パンツをはいてるかどうか、確認すれば一目瞭然!!」
「な……」
イリスの顔色は真っ青だ。
「そ、それは……あのぅ……」
そしてクララも困ったように、制服をぎゅっと掴んでいる。
ハルトはその様子をいぶかしく思ったが、すぐに思い直した。
光の天使と呼ばれる聖女様に、パンツを見せろと迫っているのだから、そりゃ困るか。
つか、アデリーナの奴、ルミナスの信者に殺されるんじゃないか？
「じゃ、まずハルるんから行こうかー」

「――って、俺かよ!?」
「そーですよー？　だってそーゆーシュミってこともあるじゃないですかー」
「バカじゃねーのか!?　てめぇ!!」
ルミナス信者じゃなくて、俺がこいつを殺したい!!
つか何だハルるんって!?　と、ツッコむ間もありゃしねえ!!
「んでー次がイリスちゃんと、クララちゃんですからねー？　逃げたら、ノーパン確定ですよー」
イリスとクララが、びくっと体を震わせる。
いかん。
俺がここで食い止めなければ!!
「ま、待てアデリーナ。よく考えてみろ！　お前、男子生徒にパンツ見せろって迫ってんだぞ!?」
「怖がらなくていーんですよー？　やさしくしますからー」
「何の話だ!?」
と、そのとき――、
「!?」

外で激しい爆発音が轟いた。
ハルトは窓に駆け寄ると、外を見た。
「あれは……っ!?」
校舎に囲まれた中庭が山のように盛り上がっている。
どんどん高さを増してゆく土は、やがて巨大な人型へと姿を変えてゆく。その身長はゆうに十メートルを超えている。
「……ゴーレムか」
土塊から生まれる怪物、ゴーレムだった。
危険レベルは9。土で構成されているとはいえ、侮れない敵だ。その巨体、そして質量から繰り出される物理攻撃は、生身の人間では対抗のしようがない。一撃で家も城壁も粉砕する、と言われている。
そして現実に――、
ゴーレムの腕が校舎に振り下ろされると、まるで模型のように校舎が潰された。ゴーレムの豪腕は屋根を押し潰し、三階、そして二階部分までめり込んだ。
そしてその腕を振ると、校舎が爆発したように弾け飛んだ。
「うっわー！　すっごいの出て来ちゃいましたね!!　何だってあんなバケモノが、学院に

現れちゃったんですか!?」
「た、大変なのです！　変態よりも大変なのです!!」
二人が慌てるのも当然だった。
なにせ体は石のように固められた土で出来ており、剣も矢も通さない。そして魔法もゴーレムの体に効果を与えるのは難しい。魔法耐性はそれほどでもないが、その堅牢な体は魔法に対しても有効だ。そして何より、破壊されてもすぐに自己修復するという再生能力に手を焼く。
いわば魔法防御された城壁が迫ってくるようなもの。
ゴーレムとは、自分の足で移動する要塞なのだ。
しかし、先程の転生婚礼でイリスの――……とにかく、起こった出来事を考えれば妥当かも知れなかった。
その瞬間、ハルトの頭に閃くものがあった。
これはむしろ、この窮地を逃れる絶好のチャンスだ！
ハルトはすかさず剣を抜くと、アデリーナとクララに叫んだ。
「俺はゴーレムを討伐してくる！　お前たちは他の生徒を守ってやれ!!」
そしてイリスと一瞬のアイコンタクト。

ハルトの意図を察すると、イリスはいち早く窓枠に飛び乗った。スカートを押さえて。
「私が一番手に行かせてもらうわ」
そして夜の空へ身を躍らせる。
「そうはいくか！」
続けてハルトも窓から飛び出す。
夜空を滑空し、二人は北方魔族へ向かう。
前を見ると、はためくイリスのスカートの下から、白いお尻がちらりと見えた。
この後、イリスのスカートを守りながら、レベル９の強敵を倒さねばならないのか。
そう考えると、ハルトは頭が痛くなった。

幕間　～少し時間をさかのぼり、ハルトとイリスの出逢いのお話～

学院に入学して、まだ間もない頃のことだ。
ハルトとイリスはダンジョンでの実習を受けていた。
グランディアから船でホライズン側に渡り、馬車で三十分ほど行ったところにある鉱山の跡地である。
くじ引きでペアを組んで、ダンジョンに潜ることになったのだが……よりにもよって、敵国同士の、しかも筆頭魔術師同士がペアを組むことになってしまった。
今から思えば、これも転生婚礼によるものなのだろうが、その当時の二人にはそんなことが分かるはずもない。
ダンジョンの中は、真っ暗な鍾乳洞。二人の周りを、魔法による明かりがうっすらと照らし出している。普通の鍾乳石は乳白色だが、この洞窟のは青。透明度も高く、まるで青い宝石で作られた迷路。魔法の明かりに照らし出された青い洞窟は、とても美しかった。
「……俺の足を引っ張るんじゃねーぞ、お姫様」

「貴様こそ、私のジャマをしないで頂戴、平民」
冷たい態度を取りながらも、イリスの胸はドキドキと高鳴っていた。
な、なんてことなの？　こんな暗くて、狭くて……ちょっとロマンチックなところに、二人っきりだなんて……。
――実は、一目惚れだった。
口では罵り、顔は冷たい表情を見せつけている。しかし入学式からずっと、頭の中はいつもハルトのことでいっぱいだった。
冷静に考えて、恋愛関係になれるような相手ではないことは分かっている。しかし、理屈ではなく勝手に考えてしまう。目が姿を追ってしまう。
ダメよイリス。ちょっとした気の迷いよ。相手はブレイズの筆頭魔術師。今だって、隙あらば私を殺そうと狙っているはず。気をしっかり持って！
と、イリスが自分に言い聞かせているときである。
ハルトはハルトで――、
くそヤベえ。近くで見ると、めちゃくちゃキレイじゃねーか。ホントにあれが、俺らと同じ人間かよ……ウソみてーに可愛いな。
――実は、一目惚れだった。

入学式で、一発カマしてやろうと思っていた。噂に聞くアブソリュートの筆頭魔術師を、死なない程度に殺してやろうか、そう思っていた。
出来なかった。
イリスの姿を初めて見た瞬間、心を奪われた。
しかし相手はアブソリュートの王族であり筆頭魔術師。憎むべき象徴そのものだ。
見た目に騙されるな。奴らは俺たちを同じ人間とは思っていない。管理し、搾取するための資源か家畜としか考えていないんだ！
ハルトはイリスのことが頭に浮かぶ度、そう自分に言い聞かせてきた。
「きゃ……!?」
「どうした!?」
振り向くと、イリスの足下が突然崩落していた。背後の地面が、奈落の底へ落ちてゆく。
咄嗟に手を伸ばし、イリスの手を掴んだ。だがそこへ、
「!!」
天井から折れた鍾乳石が落ちてきた。鋭い巨石は、まるで巨大な槍。串刺しにされたら、ひとたまりもない。
「ちっ！」

ハルトはイリスを抱き寄せ、覆い被さるようにして倒れる。
「な……!?」
ハルトの手の甲をかすめ、鍾乳石が地面に落ちた。飛び散った破片が背中に降り注ぐ。
――なんてザマだ。
ハルトは自分の不甲斐なさに溜め息を吐き、目を閉じた。
女に見蕩れて、頭がいっぱいだから、こんなドジを踏む。
もうこの女のことは忘れろ、ハルト。こいつは帝国の姫。もとより、俺とどうにかなるような相手じゃない。
「あの……」
「あぁ!?　ったく、てめぇがボーッとしてっから――」
目を開けば、至近距離にイリスの顔。
うっすらと頬を染め、瞳がうるんで揺れている。
「……ごめんなさい」
「あ、いや……別に」
って、なんで遠慮してんだよ！　俺!!
でも、体が……すげ、柔らかい。

ハルトは自分の下にあるイリスの体に初めて触れ、その存在を初めて実感した。それは意外なほど小さく、細い。乱暴に扱ったら壊れてしまいそうだ。
そして、何より最高の抱き心地。
その心地好さは、イリス以外の全てを忘れさせる魔力を持っていた。
だがそれはイリスも同じ。
初めて男の腕に抱かれた感触に、雲の中を漂うような気持ちになっていた。
硬く、逞しい体に身を任せることの、なんと心地好いことか。
女の欲望があふれて、下半身が熱くなる。
官能の扉が開くと同時に、
体の奥に潜む、魔王の半身がわずかに気配を強めた。
しかしそれはほんの一瞬。
すぐに、イリスは正気を取り戻した。
「あ……あの、もう大丈夫ですから……」
わずかに力を込めて、ハルトの胸板を押す。
「……え」
ハルトは今さらながら、押し倒していたことに気が付いた。

「うおぁっ!?」
バネ仕掛けのように飛び起きると、照れ隠しに不機嫌そうな表情を作る。
「悪いな、その……そういうつもりは、なかったんだけどよ」
「い、いえ、こちらこそ……少し考え事をしていて、油断していました。ありがとうございました」
丁寧に礼を述べると、しっかり頭を下げた。
「……調子が狂うな」
「何がですか？」
「あんた、帝国のお姫様だろうが。何でブレイズの人間に、あんたから見りゃ平民の俺なんかに頭を下げんだよ？」
「命の恩人に礼をするのは当たり前です。それがたとえ敵であっても。身分はなおさら関係ないでしょう？」
当然のようにイリスは答える。
その真っ直ぐな瞳に、ハルトはひるんだ。
まるで、自分の方が差別をしているような気分になる。
「あなたこそ、どうして私を助けてくれたのですか？　自ら危険を冒してまで……あのま

ま私が落ちていれば、ブレイズとしては願ったり叶ったりでしょうに」
確かにその通りだった。
ハルトはなぜイリスを助けてしまったのか、よく分からなかった――いや、本当は分かっている。
しかし、認めることが出来ない。
「つい、体が勝手に動いた。それだけだ」
「だから、相手が私であっても、助けてしまった――そういうこと？」
「……」
むしろ、相手がイリスだったからこそ、あんなに必死になったのではないか――と、ハルトは心の中で自分に問いかける。
急に口をつぐんだハルトをまじまじと見つめていると、その右手から血が滴っていることにイリスは気付いた。
「ケガをしたの!?」
ハルトは右手から流れる血を見て、舌打ちをした。
「くそ、カッコ悪いところまで見られちまったな……」
「そんなこと気にしてる場合!?　見せて！」

イリスはポケットからハンカチを取り出すと、ハルトの手の甲に当てた。白いハンカチに広がる赤い染みを見つめていると、イリスの中で疑問が広がっていった。

――この人は、どうして身を挺して私を助けたの？

ブレイズは極悪非道な存在で、アブソリュートの人間と見れば、隙あらば殺そうとする。相手が女であれば、陵辱してから殺す。子供であれば、奴隷にする。

そういうものだと教わってきた。

この人は他のブレイズとは違う？

それとも……私が教わった知識の方が違ってるの？

「こんな高そうなの、弁償できねーぞ」

「必要ないわ」

「……あんた、ブレイズが憎くないのか？」

イリスの手がハルトの手を押さえたまま、ぴたりと止まった。

「……ブレイズという国は、私から多くのものを奪った……だから嫌いよ」

「だったら、何で手当まで？　もう礼は返したんだ。そこまでする必要ないだろ？」

イリスはハンカチをハルトの手の平に巻き付ける。

「つい体が動いて、手当をしてしまっているの」

「んだよ、そりゃあ」

ハルトは思わず笑ってしまった。

その屈託のない笑顔に、イリスの胸がどきっと跳ねた。

「……あなたの笑った顔、初めて見たわ」

「あんたの笑った顔は、まだ見たことがねーな」

イリスは意地悪を言われたように不満そうな顔をした。口をへの字に結び、眉を寄せる。

それはそれで、見たことのない表情だった。

怒った顔も可愛らしい。ハルトは胸の中が熱くなった。

「さっきの質問だけどな」

「え？」

「やっぱり、俺は……あんたを助けたかったのかも知れない」

「でも私は、あなたの嫌いなアブソリュートの貴族よ？」

「自分でも分からねーけど……なんか、あんたは特別なんだ」

――特別、か。

「アブソリュート帝国の王女で筆頭魔術師だものね」

少しうんざりしたように、イリスはつぶやく。

「それは、どーでもいいんだけどよ」
「……え？」
「むしろそんなもん、ない方がいい」
イリスの鼓動が激しくなった。
そんなことを言われたのは初めてだった。自分の身分や財産あっての、自分の価値だと思っていた。
「でも、王女でも、筆頭魔術師でもない私に、何の価値があるの？」
「まさに、金持ちが金の使い方が分からずに困ってる、って感じだな」
やっぱり自分をお姫様とバカにしているのかと、イリスの目つきが険しくなる。
「そんだけ美人で、可愛くて、スタイルも良くて、声もキレイで、剣も魔法も抜群に強くて、おまけに頭も良くて、性格も良くて、優しいとか、もう反則だろ。どんだけステイタスを盛れば気が済むんだって感じだ。そこまでいけば、身分とかもう飾りだろ」
と、吐き捨てるように言った。
聞き終わる頃には、イリスの顔が真っ赤に染まっていた。
こ……ここまで、何のひねりもなく、趣きも優雅さも洒脱さも何もなく、ストレートに褒められたのは初めてよ！　何だか異常に恥ずかしいんだけど!!

恥ずかしさに、思わず視線を落とす。
そこで、ずっとハルトの手を握ったままだったことに、今さら気が付いた。
「――ひゃっ!?」
慌てて離すと、手を後ろに回して隠した。
落ち着きなく周囲を見回し、表情をくるくる変えるイリスを見て、ハルトは、
――やべえ、かわいい。
と思った。
確かに一目惚れだった。
しかし今までは、その見た目でドキドキしていただけだ。
だから、所詮はアブソリュート、所詮はお姫様、と嘲ることが出来た。
なのに――、
イリスは、こほんと咳払いをすると、取り繕うようにキリッとした表情を浮かべた。ただし、頬はまだ赤いままで。
「わ、私にはアブソリュートの王女としての責任があるの。身分があった方がいいとか、ない方がいいとか、そういう問題じゃないわ。まあ、褒めてくれたのは、嬉しいというか……わ、悪い気はしないけど……」

脱線しそうになったことに気付き、イリスは慌てた。
「じゃなくて！　えっと……私の使命は、国民一人一人が笑顔で、健やかに暮らせる国を作ること。筆頭魔術師としての強さは、国を守るためではなく、人々を守るためにあるの……って！　何をニヤニヤしてるの!?」
話を重ね、イリスの内面が分かるにつれて、ハルトの中でイリスに対する想いが強くなってゆく。
「生まれた時からお姫様だもんな。今さらそうじゃない自分なんて、想像できないか」
「……そうでもないわ」
「なに？」
イリスは少し遠い目をした。
「もし、王女の身分も、シルヴェーヌの名もなかったのなら……」
イリスの瞳にハルトが映る。
「好きなものを、誰にも気兼ねなく好きと言える……もしそんな風に生きることが出来るのなら……」
ハルトもまた、イリスの瞳を見つめた。
いつの間にか顔が近付いていた。

吸い寄せられる。
押し止めるように、ハルトはイリスの二の腕に触れる。
イリスはハルトの胸に手の平を当てる。
しかし、相手の体を押し止めることはなかった。二人は体を寄せ合った。
重大な罪を犯しているような気分だった。
こんなことをしてはいけない。
見つかったら、大変な事になる。
そんな警報が頭の中で鳴り響いては消える。
理屈ではいけないことだと分かっている。
しかし理性では、この衝動が抑えられない。
それに、この人となら、
この学院の理念に基づいた、アブソリュートとブレイズの友好が結べるのではないか。
そうすれば、もしかしたらいつか、この人と一緒に歩ける日が来るかも知れない。
好きと言える日が、来るかも知れない。
そのとき、ハルトもまた――、
イリスと同じ事を考えていた。

今すぐには無理でも、いつかイリスと堂々と手をつなげる日が来るのでは。
憎まれ口以外の会話を人前ですることも出来るのではないか。
そんな夢が、現実に起こりうると感じさせる時間だった。
だが、次の瞬間、
ハルトの体の奥底で、何かが開くような感覚があった。
その奥には何かが潜んでいて、魔力があふれ出てくる。
ふと、子供の頃のあることが思い出された。
両親を殺され――その復讐を果たしたとき、
この体から炎が噴き出したあのとき聞いた、あの声が、
自分の中に潜むあれが、
――魔王の半身が顔を出そうとしているような。
「なあ、あんた……」
まさか。
「イリス・シルヴェーヌ……もしかして、あんたも――」
その時、地響きが近付いて来た。
「――!?」

身構えるよりも早く、奥の方から洞窟が崩落し始める。
「なっ!?」
幸い崩落は目の前で止まった。岩が積み上がった向こうに、巨大な空間が出現している。
砂煙が立ち込める中に、うっすらと浮かび上がる影。
それは炎に包まれた、鳥とも獣ともつかない姿。
コウモリのような翼に、猛獣のような体。しかし、上半身は人間のように進化し、太く強靭な腕を持った、二足歩行の怪物。
「あれは……バルログ!?」
レベル11の北方魔族――バルログ。
強さを誇示するような巨大なツノと、炎に燃える小さな目が、見る者を圧倒する。背中に生えた炎の翼を広げると周囲が燃え上がり、ムチのようにしなる尻尾が一閃すると、近くの鍾乳石が真っ二つになる。
咄嗟に二人は剣を抜く。
「このダンジョンは初心者向けのはずよ!?　何でこんなところに!?」
バルログは一人、二人で倒せるような魔族ではない。少なくとも、五、六人の熟練魔術師によるパーティでなければ話にならない。それでも必ず勝てるとは限らない。

過去、ダンジョンに挑んだ多くの勇者がバルログの餌食になってきた。
そして普段はダンジョンに潜むバルログだが、ひとたび町を襲えば、その町は全滅を覚悟しなければならない。
その炎は全てを焼き払い、通った跡は全て焼け野原となるからだ。
バルログは大きな口を開くと、体を震わせる咆哮を放つ。
それは恐るべき殺人予告。
翼を広げ、二人に襲いかかった。
これほどの強敵と向き合ったのは、二人も初めてだった。
もし倒すとすれば、高レベルの魔法を使うしかない。
しかし、それは超高難度の魔法であり、準備にも時間がかかる。いかに筆頭魔術師の二人とて、そう簡単に発動させることは出来ないのだ。
だが、目の前のバルログは待ってはくれない。
ハルトは右手に持った剣を前に出す。
こんなところで、俺は喰われるのか？
筆頭魔術師にまで上り詰め、やっとここからだってのに。
そうだ、こんなところで死んでたまるか。

俺は帝国を倒すんだ。
そのために、今まで生きてきた。
しかし……今は、それよりも――、
ハルトは隣で剣を構えるイリスを見つめた。
俺が喰われたら、次はこいつが喰われる。
……。
させない。
それだけは、絶対にさせねえ!!
ハルトはイリスの前に出ると、剣身に手を当て、魔法式を組み立てる。
「俺が時間を稼ぐ！　その隙にお前は逃げろ!!」
「……分かりました」
素直な答えが返ってくると、ハルトはバルログを睨み付ける。
「これで心置きなく――」
ハルトの背後から気配が消えない。それどころか――、
後ろを見ると、イリスが剣を構え、ハルトと同じように魔法の準備をしていた。
「何してんだ！　とっとと行きやがれ!!」

「私が高レベルの魔法式を組み立てる時間稼ぎ、お願いします」
「て、てめ……!?」
「あなたなら出来るでしょう？　ブレイズの筆頭魔術師」
そう言って、にっこり微笑む。
それは――初めて見る、イリスの笑顔だった。
ハルトは舌打ちをすると、バルログに向き直った。
そして剣を構え、
「楽勝だ!!」
ハルトの全身から炎が噴き出した。
火の粉が舞い、洞窟を赤い光が照らし出す。
全身を魔力の赤い光が駆け巡り、剣の切っ先に魔法陣が浮かび上がる。
「『ヴァルカン』!!」
ハルトが剣を振るうと、炎の軌跡がバルログに向かって飛んで行く。
炎の弾丸は額に命中。バルログは苦悶の声を上げ、上体をのけぞらせた。
中レベル魔法『ヴァルカン』は、遠距離攻撃を可能とする。タメを作って剣を振ると、強い炎を撃ち出すことが出来る。剣を向けるだけでも発射は可能だが、一発の威力は小さい。その代わり、連射が可能だ。

ハルトはその連射機能を使いながら、洞窟内に出来た広い空洞を駆けた。
炎の弾丸が、次々とバルログの体の側面に命中。そして気を引くようにわざと手前の岩に当てて、派手な音と煙、破片を飛び散らせる。
そうして、バルログの意識をイリスから強引に引き剥がす。
ハルトの狙い通り、バルログがイリスに背を向けた。
「!!」
次の瞬間、バルログが目の前にいた。強靭な腕を振って、ハルトを斬り裂こうとする。
その攻撃をかわすが、今度は尻尾が背後に回り込んで襲ってくる。それを振り向きざまに剣で弾く。そして後ろへ飛んで距離を稼ぐ。
すかさず追いかけてくるバルログの腕と尻尾を、剣で叩き返す。
「『フレイム』！」
低レベル魔法を放つが、その程度では軽いダメージしか与えられないはずだ。
ただでさえ防御力、耐久力が高い上に、バルログは炎の魔族。炎の魔法には耐性がある。
ハルトとは相性が悪い。
しかし――、

フレイムが思ったよりもバルログに効いている。
ものともせずに襲ってくるかと思いきや、ひるむ様子を見せた。
魔法の威力が――いつもより上がっている？
とすると……。
ハルトの中で、予想が確信へと変わってゆく。
そのとき、白い冷気が渦を巻いた。
空気中の水分が凍り、キラキラとした輝きが舞い降りる。
「――雪の精霊、氷結の女王よ、我が響きに応えよ」
美しい声で詠唱される呪文が聞こえる。
「――潔白にして残酷な白に、清廉にして凄惨な青に封じ込めよ」
イリスの魔力が増大してゆく。
その気配に、バルログも気付いた。
本当に警戒しなければいけない相手が誰なのかを。
凄まじい咆哮を上げ、バルログは首をイリスの方へめぐらせる。
しかしもう遅い。
バルログの足下に、青い魔法陣が浮かんだ。

イリスの瞳が青く輝き、美しい声が処刑執行の合図を宣言する。
「『アイスエクスプロージョン』!!」
バルログの体が爆砕した。
凄まじい爆発音が轟き、衝撃波が洞窟内に広がった。
ただし、炎は一切ない。
炎の代わりに氷が、黒煙の代わりに白い冷気が、火の粉の代わりに氷の結晶が飛び散った。
それは、いわば氷の爆発。
バルログの内側から広がった氷が、その体を木っ端微塵にし、まるで爆煙と炎のような形をした氷が、後に残された。それらはまるで、氷の芸術品だった。
ハルトとイリスは顔を見合わせた。
二人の表情には、危機を乗り越えた喜びよりも、驚きと戸惑いがあった。
イリスの頬に冷や汗が流れる。
高レベルの魔法の起動にしては早過ぎた。
しかも破壊力が、今までとは比べものにならない。
加えて、ハルトと触れ合ったときの、あの感覚。

体の奥底にある扉が開き、自分ではない何かが、膨大な魔力と共に這い出ようとした。
目の前ではハルトもまた、驚きと、深刻な思いを眉間に刻み込んでいる。
「やはり……イリス、あんたは……」
――やっぱり。
現実は、想像以上に残酷だった。
イリスの青い瞳に、涙があふれる。
初めて、ブレイズで分かり合えそうな相手だった。
初めて、ときめいた相手だった。
初恋だった。
それが、どうして――
「どうして……もう一人の『魔王の半身』が、ハルト……あなたなの？」

第二幕　討伐競技会か、彼女と密会か、それが問題だ

ゴーレムが学院を襲撃した翌日。
半壊した校舎の前に、全校生徒が整列していた。その前に立つのは一人の老人。
「昨夜、突如出現した北方魔族のせいで、校舎の一部が半壊したのは知っての通りじゃ。しかし、負傷者が一人もおらぬというのは、不幸中の幸い。なによりじゃ」
長い白髪と白い髭。背筋が伸びた長身に、長いローブを身にまとっている。長い杖をついている姿は、まさに魔法使いのイメージそのもの。
グランマギア魔法魔術学院の学長――アーネスト・グリーンウッド。
この学院設立の発起人である。
「被害が最小限に抑えられたのは、いち早く駆けつけ、たった二人でゴーレムを倒した、ブレイズのハルト、アブソリュートのイリスの両筆頭のおかげじゃ。学院を代表して、礼を言わせてもらうぞ」
生徒たちからも、惜しみない拍手が二人に送られた。

「別に、大したことはしてねーよ」
「当然のことをしたまでです」
——と、謙虚に答える二人だが、内心は違う。
あの北方魔族は、ハルトたちが呼び寄せたようなものなのだ。しかも転生婚礼による、えっちなアクシデントによってである。
正直、褒められるのは気が引けた。
だが、そんな二人の気も知らず、周りの生徒たちは口々に褒めそやした。
「やっぱり凄いわ……あれだけのことをしていながら、なんて奥ゆかしいのかしら」
「俺だったら自慢しまくるのに……すげえクール」
そんな声が聞こえてくる度に、罪悪感が胸を突き刺す。
「校舎の修理を行うこともあり、今日は課外授業じゃ。良い機会なので、討伐競技会を執り行いたいと思う！」
「討伐……競技会だと？」
ハルトが眉を寄せると、後ろにいたクロードが耳打ちする。
「決められたフィールド内にいる魔族を、制限時間内にどれだけ倒せるか、という競技会ですよ。当然、ブレイズとしてはアブソリュートには負けられませんね」

「……そうだな」
それから生徒たちは移動を開始。学院の側を流れる運河に、船着き場がある。そこから国ごとに分かれて船に乗り、大運河カナル・グランデに出た。
湖の上に浮かぶ町グランディアは、水上交通が盛んだ。カナル・グランデは、荷物や人を積んで出てくる船で、いつもごった返している。
水路を出て、広い湖面に出ると急に船の数が少なくなる。向かう先は、対岸のブレイズ領。そこにある広い草原と森が、今回のフィールドだ。
船着き場から上陸した生徒たちは、草原を歩いて行く。
遠くからだと分からなかったが、足下に石畳が続いていることに気付いた。
「あれ？　ここって昔、人が住んでたのかしら？」
ブレイズの女子が意外そうにつぶやくと、
「ああ。十一年前までな」
と、ハルトが答える。
「へー詳しいのね、ハルト」
「住んでたからな」
「えっ……それって」

女子は申し訳なさそうに、口をつぐんだ。
皆、ハルトの両親がアブソリュートの襲撃で死んだことを知っている。ただ、まさかこがその場所だとは思わなかった。
クロードが心配そうに、ハルトに声をかける。
「ハルト……」
「別に気にしちゃいない。それよりも、この討伐競技会、勝つぞ！　アブソリュートを叩きのめす!!　いいなお前ら!!」
ハルトが活を入れると、ブレイズの生徒は全員「おおっ!!」と声を上げた。
「まったく。被害者気取りか」
と冷笑を浮かべるのは、一人だけメイド服を着たアブソリュートの女子。
ブレイズの会話を、耳聡く聞いていたフランセットである。
「その戦いは、ブレイズが帝国に侵略しようとするのを未然に防いだものだ。それに、我らの兵も全滅している。誰かさんのおかげでな」
ハルトは無視するように黙っていたが、他の生徒がいきり立った。
「そんなもん、てめぇらのでっち上げだろうが！　このアマぁ!!」
「ふん。魔族の前に、お前を叩っ切ってやろうか？」

「やめなさい、フランセット」
イリスが静かにたしなめる。
メイド服のエプロンから剣を抜きかけたフランセットは、大人しく剣を収めた。
「過去の事よ。人によって真実が異なってしまう程に、時が過ぎてしまったわ。議論に勝つことより、討伐競技会で勝つことを考えましょう」
そう言いながら、ブレイズの生徒に囲まれたハルトにちらりと視線を送る。
本当は、申し訳ないという思いを伝えたい。
しかしその気持ちを顔に出すわけにはいかない。イリスは冷たい目でハルトを見つめ、同じようなまなざしをハルトも返す。
突然、前の方でアデリーナの突き抜けるような声がした。
「あっれーっ!?　あれあれ、もう誰かいますよーっ!?」
確かに、行く手の草原に黒い服を着た女性が立っている。
黒髪に褐色の肌。呪術的なアクセサリーを身に着けていて、占い師のような神秘的な雰囲気をまとっている。しかし、着ている服は露出度が高く、そこだけ見ると妖しげな店で働く踊り子のようでもある。
胸元も大きく開いていて、谷間どころか、丸みを帯びた胸の半分近くが露出してしまっ

ている。スカートにも深いスリットが入り、太ももどころか腰の辺りまで褐色の肌が覗いていた。

どう見ても学院には相応しくないその女性に向かって、校長が挨拶をするように杖を上げた。

「おお、ファティマ先生。準備はよろしいかな？」

生徒たちは全員「これが先生!?」と、驚いた。

全員揃ったところで整列。前には、アーネスト学長と、エルリック先生。そして、ファティマ先生と呼ばれた、見たことのない美人。

「みな、驚いたじゃろう。こちらの先生は、新たに着任したファティマ・ネフェル先生。担当は闇の魔法じゃ」

――闇の魔法!?

生徒たちが、一斉に抜刀しようとする。

「待て待て！　落ち着くのじゃ。彼女は怪しい者ではない。れっきとした勇者ギルドのメンバーじゃ」

勇者ギルドとは――北方魔族の侵略と、魔王の復活を阻止することを目的として設立されたギルドである。メンバーは世界の危機を憂える心ある魔術師たちであり、人数は少な

いながらも実力者揃いだ。特定の国には属さず、独立した活動を行っている。

グランマギア魔法魔術学院は、この勇者ギルドによって設立され、教師も勇者ギルドのメンバーから選ばれている。

クロードがメガネの位置を直しながら質問をした。

「しかし、なぜ勇者ギルドに闇の魔法使いが？」

「ブレイズのクロードよ。戦うには、まず敵を知らねばならん。しかし闇の魔法は、魔王の眷属が使う邪法。我々、真っ当な人間にとっては縁のない知識じゃ。とはいえ、それでは実戦で勝つことが難しい。のう？　エルリック先生」

エルリック先生は、いつも通りの爽やかな笑顔でうなずく。

「仰るとおりです。相手の情報がまったくない状態で実戦に挑んでも、犠牲者が増えるだけ。私は教え子が、無駄に犠牲になるのは耐えられません」

「そこでじゃ、我々勇者ギルドでは独自に闇の魔法を研究していたのじゃ。その第一人者が、このファティマ先生。ゆえに――」

アーネスト学長の眉間のしわが深くなり、険しい表情になった。

「北方魔族とも、闇の魔術結社とも無縁じゃ」

――闇の、魔術結社だと？

ハルトは問いかける視線をクロードに向ける。
しかしクロードも肩をすくめるだけだった。
「おい、その闇の――」
ハルトが質問しようとしたとき、
「なるほどなのです」
ルミナスのクララが、ファティマ先生に向かって、祈るように指を組み合わせ、目を閉じた。
「私たちのことを想って頂いてのご配慮。感謝するのです」
しかしファティマ先生は一言も発することなく、じっとクララを見つめていた。
やはり、どこか神秘的――悪く言えば不気味。
そして、妖艶だった。

○　○　○

討伐競技会が始まった。
指定されたフィールドは、約一キロ四方の範囲。草原、森、川が含まれるなど、変化に

富んだ環境で、様々な魔族が潜んでいる可能性がある。
とはいえ、その魔族は本物ではない。
ファティマ先生の闇の魔法によるものだ。
――召喚魔法。
魔族を出現させて使役する魔法で、ハルトも見るのは初めてだった。
ファティマ先生が作り出す黒い魔法陣から、次々と現れる魔族の姿――スライムやウィル・オー・ウィスプ、ゴブリンに、生徒たちは驚きを隠せなかった。
しかし、その魔族たちは現実に存在するわけではない。
一種の幻術に近いと言えるだろう。見た目や生態、戦い方は本物そっくりだが、実際に攻撃を食らったときのダメージは術者のコントロール次第。
すなわち安全な訓練が可能だ。
ファティマ先生が、本当にダメージを低くしてくれていれば、だが。
ハルトはそんなことを考えながら、目の前に現れたゴブリンを無意識に斬り倒していた。
今回はレベル3までの魔族しか召喚されていない。正直、まったく手応えがないのだが、周りを見渡すと、
「くっそぉ！　ゴブリンのくせに、けっこー強えぞ!?」

「いやぁあっ！　スライム弱いの知ってるけど、気持ち悪くってアタシいやあぁあ！　誰か代わってぇえ!!」
ブレイズの生徒たちは阿鼻叫喚のるつぼだ。
クロードも、その様子を頭が痛そうな顔で見つめている。
「どうやら、うちの連中は魔族に慣れるところからですね」
「そうだな。でも、こいつらだって選ばれた実力者だ。慣れれば、すぐに戦えるようになる。今日のところは、他の国も似たようなもんだろ」
「……と思いたいところですが」
クロードは少し離れた小高い丘を指さした。
そこに、金色に輝く光の壁が屹立している。
四方を光の壁に囲まれた中に、ルミナスの生徒たちが整列し、指を組み合わせていた。
「あれは……ルミナスの防御魔法か？」
守りを固めたところで、敵を倒さなければ点にならない。ルミナスは臆病者の集まりなのか？
整列した生徒の中心に立つのは、筆頭魔術師クララ・シュトラール。
「さあ、皆さん。声を合わせて歌うのです。迷える子羊たちを、ルミナスの光の聖堂へと

誘いましょう――ルークス」
「「ルークス」」
祈りの言葉を口にすると、ルミナスの生徒たちは声を合わせて歌い出した。賛美歌のような、厳かで美しい調べがフィールドに響き渡る。
その歌声に呼ばれるように、魔獣は次々と向きを変え、光の聖堂を目指し始めた。
だが――、
光の教会に辿り着いた魔獣は、断末魔の叫び声を上げ、ことごとく消滅してゆく。
クララは慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。
「歌の誘いには逆らえないのです。そして悪しきものが光の聖堂に触れれば、消滅するのが運命なのです。悪しき魂を救い、来世に送り出すことこそ、我らの使命なのです」
自分からは動かず、罠を仕掛けて相手をおびき寄せる。そして、自ら死ぬように仕向けている。
「言ってることは聞こえはいいが、やってることはえげつねえな……」
吐き捨てるようにつぶやくハルトだが、クロードはメガネの奥で目を光らせる。
「しかし効率良く点を稼いでいます。ここはハルトには申し訳ないのですが――」
「出稼ぎしてこいってんだろ」

「さすが。以心伝心ですね」
「ったく……こいつらの面倒は頼んだぞ」
ハルトは走り出すと、丘を駆け上がる。そして、光の聖堂に集まってくる魔族の中に飛び込んだ。
「ああっ!?　ハルトさん、何をするのです!?」
自分たちの周りに集まってくる魔族を、次々と斬り倒してゆくハルトに、クララが慌てた声を上げた。
「ありがとよクララ！　稼ぎやすいぜ!!」
「まったくもうっ！　ずるいのです!!」
ぷんすか顔をされても、可愛いだけで全然恐くない。
ハルトは数十匹の魔族をあっという間に葬った。
しかし、歌が止まってしまったので、魔族が集まってくることもなくなった。
見ると、すっかりへそを曲げたクララは、そっぽを向いてしまっている。
ハルトがここにいる限り、歌ってはくれなさそうだ。
このままだと、アブソリュートとホライズンに後れを取るかも知れない。そう考えたハルトは、丘を下り森の中へ入って行った。

しかし、嫌な予感がした。
闇雲に走っているつもりでも、自然と転生婚礼がイリスと自分を引き寄せているのではないかと不安になる。そして、少し期待もしていた。
深い森の中で、もし二人っきりで出逢えたなら……、
「もーしもーし、ハールトさーん♪」
「うおぁああっ!?」
不意に話しかけられ、ハルトは飛び上がった。
「この脳天気な声はアデリーナか!?　どこだ!?」
「こーこでーすよー」
見上げると、木の上にアデリーナが立っていた。フリルのついたピンクのパンツが丸見えだが、本人は気付いていないのだろうか。
樹木に絡んでいたツタが急に伸びて、アデリーナの体に絡みつく。そして、ゆっくりとアデリーナの体を地面の上に下ろした。
――ホライズンの土属性魔法か。
それぞれの国に異なる文化があるように、魔法にもそれぞれの国で特徴がある。
ブレイズ共和国は炎属性。

アブソリュート帝国は氷属性。
ルミナス教国は光属性。
ホライズン王国は土属性、というようにである。
土属性の魔法は、大地と自然の植物を利用した魔法に特化している。それはこの世界のどこにでもあるものだ。地味なように見えるが、恐るべき実力を備えている。
しかし、ホライズンの問題は他にある。
「どうしたアデリーナ。こんなところで油を売ってていいのか？」
「いーやー。みんな好き勝手に動くもんですから、どーしよーもないです。多分、半分は今頃どっかでお茶してるんじゃないですかねー？」
北方から一番遠い南の国という土地柄か、気候のせいか、呑気な奴が多い。良く言えば自由、悪く言えば適当。
「まーそもそもホライズン王国は、自分が一番になろうって感じじゃないですし。商売でのし上がった国ですからね。皆さんのお手伝いをするのが、あたしたちの役割ですよ！」
なぜか得意そうに胸を反らし、大きなおっぱいがぶるんと上下に弾んだ。
「そ、そうか。しかし、今は特に用はないな」
「そーですかぁー？　アデリーナちゃんがご入り用ではありませんかー？」

甘えるような声で、ハルトにすり寄る。
「だから必要ねえって言ってんだろ」
「イリスさんと二人っきりになれるように、手引きしますよ？」
「……っ!?」
アデリーナは、ニマニマとした笑みを浮かべていた。
こいつ……一体、何を知っている!?
「何が言いたいのか、分からねーな」
「えーでも、昨夜は二人っきりで会ってたじゃないですかー」
「会っていたわけじゃない。偶然、出っくわしたんだ」
「あんな場所でですかー？　よっぽど気が合うんですねー」
ハルトの中で、警戒レベルがどんどん上がってゆく。
今までただのアホだと思っていた相手が、恐ろしく狡猾な策士に思えてくる。
猫を被って、密かに弱みを探っていたのか？
「そんな恐い顔しないでくださいよーぅ。アデリーナちゃんは、ハルトさんの味方なんですからー」
「昨夜のことだがな、誰が何と言おうと、ただの偶然だ。イリスは俺の宿敵。そして俺の

目的はアブソリュート帝国を倒すことだ。今は北方魔族に対抗するため、剣を収めているに過ぎない」

アデリーナは腕を組み、眉を八の字にして首を傾げる。

「うーん、そーなんですかぁー。ちょっとアデリーナちゃん、読み違えましたかねー？」

「盛大な誤読だな」

「まーでも、ハルるんの味方であることは確かなんで！　何かあったら、アデリーナちゃんを頼って下さいね！」

くるっと表情が変わり、大輪の花のような笑顔でアデリーナは自分の胸を叩いた。その衝撃で、おっぱいがぶるると揺れる。

「じゃっ！」

と、手を挙げると、再びツタがアデリーナの体に絡みつき、その体を木の上へと引き上げる。そして、木から木へ、ブランコを乗り継ぐようにして、去って行った。

アデリーナ。奴は一体、何者なんだ？

森の奥へ進みながら、ハルトはホライズンの筆頭魔術師について考えていた。

強者に肩入れすることで勝ち馬に乗る、というのはホライズンらしい。もし本当にイリスとの関係を進めるのに協力してくれるのであれば、それに越したことはない。

しかし、いつ裏切られるか分かったものではない。やはり、秘密を明かすわけにはいかないだろう。

そう結論づけたとき、前方で唸り声が聞こえた。

あの声はゴブリンだ。

声が重なって聞こえるということは、一匹ではなく、群れか。

ハルトは赤い剣を構えると、走り出した。

目の前に背の高い茂み。あの向こうだ。

「『フレイム』」

愛用の赤い剣、フェニックスに炎を走らせ、一気に茂みに飛び込む。

背の高い草のせいで、向こう側は見えないが問題ない。草の壁を抜けた瞬間に襲われても、対応は可能。

草を突き抜けた瞬間、鋭い剣撃が襲った。

「!?」

赤と青の軌跡がぶつかり、火花と氷の結晶が散る。

「えっ!?　は、ハルトくんっ!?」

慌ててイリスが剣を引く。

不用意に離れようとして、足をもつれさせ倒れそうになった。
咄嗟に助けようとしたハルトも、イリスの強烈な一撃を受けてバランスを崩していた。
結果、二人でもつれ合うようにして倒れる。
――危なかった。
ハルトは冷や汗を流した。
あとほんの一瞬遅かったら、イリスの剣に貫かれていただろう。
それに比べれば、転んだくらい安いもの……？
顔がふかふかの太ももで挟まれていた。
目に映るのは、まくれ上がったスカートと、雲の浮かぶ青空。そして肌色をした二つの山と、その谷間に食い込んだ、いかにも上質そうな白い薄布。
つまり目の前に見えるのは、イリスのお尻と食い込んだパンツ越しの青空。
「!?!?」
慌てて起きようと首を起こすと、イリスの股の間に顔を押し付ける結果になった。
「あぁんっ♡」
イリスの悩ましい声が、ハルトの股間に響いた。
どうすりゃこんな体勢になるんだよ!?

誰にツッコんでいいのか分からず、ハルトは超至近距離にあるイリスの股の間に話しかける。
「お、起き上がれるか？　イリス」
体の上で、イリスがビクッと震えるのが分かった。
「あ♡……ご！　ごめんなさいっ!!」
イリスは飛び上がるようにして起き上がった。ハルトも照れ隠しに不機嫌そうな顔をして立ち上がる。
「あ、あの、ハルトくん、ケガはありませんか？」
「……イリスこそ、大丈夫だったか？」
足下を見ると、ゴブリンの死体が十ほど転がっている。先を越されたようだった。
「はい、お気遣いありがとうございます」
心配されたのが嬉しいらしく、胸に手を当ててぽっと頬を染める。
「今の、転生婚礼ですよね？」
「でなきゃ、あんな器用に倒れられるかってんだ」
「……ですよね」
イリスは引きつった笑みを浮かべた。

「あー……まあ、そのおかげでこの広いフィールドで偶然会えた」
「ふふ、そこだけは転生婚礼に感謝ですね」
口をつぐみ、耳を澄ます。聞こえてくるのは、風が草木を揺らす音のみ。辺りの気配を探っても、生き物の気配はない。
「せっかく、二人っきりですから……」
つつ……と近寄ると、イリスはハルトの袖の、肘の辺りをつまんだ。
恥ずかしそうに顔を伏せ気味にしているが、耳が少し赤らんでいるのが分かる。
ハルトは心の中で「やべえ、可愛い」と繰り返した。
背後に草の壁はあるが、目の前は遮蔽物がない。森の中に、ぽっかり出来た広場のようになっている
「ここは隠れる場所がない。もう少し先の、森の中に入るか」
イリスは、黙ってこくりとうなずいた。
ハルトの袖をつまんだまま、森の中へ入ろうとした。
「――なに!?」
「……っ!? これは!?」
森の中に入ったはずだった。

しかし、いつの間にか、朽ち果てた教会の中にいた。
「どこだ……ここは?」
かつては参列者が座ったであろうベンチはなく、壁も天井も穴だらけ。奥にある祭壇には、太陽の輝きを模したルミナスのシンボルが掲げられていた。但しそれも、半分に砕けている。
「ルミナスの、教会でしょうか?」
確かに森の中を歩いていたはずだ。それが、瞬きする間に違う場所へ移動していた。
足下を見ると、消えゆく魔法陣がわずかに見える。
「転移の魔法か……一体、何でこんなものが」
「何かあったときの、緊急避難用とかでしょうか?」
「……分からねえ」
一番分からないものが、祭壇の前にあった。
ハルトとイリスは、それに近付いた。
「……ベッドですね」
見るからに新品のベッドだった。
この廃墟と化した教会の中で、あらゆる意味で浮いている。

「魔法的な仕掛けは、特にされていないようだな……」
イリスはベッドの感触を確かめるように、マットレスに両手をついた。
「そうですね……質も悪くありません。でも、なぜここに？」
「さあな。ここをねぐらにしている宿無しが、どこかから盗んで来たのか、討伐競技会の準備をしてた教師がサボるために使ってたのか」
そう言うハルト自身も、その答えには全く納得していなかった。
「まさか、これも転生婚礼のせいなのでしょうか？」
ハルトとイリスはベッドに並んで腰をかけた。
「その可能性が一番高いな」
「ですよね……いえ、そうです。たぶん、きっと。間違いなく」
「イリス？」
「そうでなければ……私がこんなはしたない気持ちになるはずが……」
ハルトの肩に頭を乗せ、体を預けてくる。
その重みが、とても気持ち良かった。
俺だって同じ気持ちだと答えたかった。行動で、イリスの気持ちに応えたい。
だが、それは出来ない。

それと引き換えに、世界が崩壊してしまうから。
「イリス……そろそろ戻ろう。ここがどこか分からないが、討伐競技会のフィールドからそう遠くないはずだ。あの転移魔法の魔法陣なら、近場のはず――」
突然、イリスがハルトに覆い被さった。
「な……!?」
イリスは馬乗りになり、ハルトをベッドに組み伏せた。
「どうしたんだ、イリス!?」
「ごめんなさい……実は、ハルトくんの上に倒れたときから……もう、その……」
申し訳なさそうにつぶやくイリスの瞳に、ハート形の光が妖しく浮かんでいる。
――転生婚礼の催淫効果か!?
「しっかりしろ、イリス！」
「今まで我慢してたんですけど……もう、無理♡」
襟のタイを解き、シャツのホックを一つずつ外してゆく。
その隙間から、イリスの白い肌と、白い下着がちらりと覗く。
それを見ていると、ハルトの頭もぼんやりと霞がかかったようになり、イリスへの欲望が高まってゆく。

「ねえ……もうガマンするのはやめて……ひとつに♡なろ？」
くそ！　正気を保て‼　俺がしっかりしないと、誰がイリスを守るんだ‼
イリスをはね除けようとした。が――、
「くっ⁉　うごか……ね」
背中がベッドに張り付いたように動かなかった。
これは……魔法で俺をベッドに貼り付けている⁉
イリスがやったのか？
いや、そんな素振りは見せなかった。
しかし、仮にイリスの魔法だとしても、これはイリスの本意ではない。
あくまで転生婚礼の効果。イリスの中にいる『魔王の半身』の仕業だ。
お互いの中に魔王の半身がいると分かってから、二人は古文書や古い魔導書を片っ端から調べた。
そして見つけた古い記述の中に、転生婚礼についてこう書いてあった。
『魔王の半身はお互いを引き寄せ合うもの。そして二人の宿主を一つにするよう、自然の摂理に干渉し、催淫効果を発揮する。いわゆる闇の魔法である性魔術である。二つの体が合一することにより成就する性魔術の力で、「魔王」は復活を果たす』

「イリス！　このまま一つになったら、世界が滅ぶんだぞ⁉」
しかしイリスは淫らな笑みを浮かべた。それはいつもの凛々しい顔とも、二人きりの時の可憐な顔とも違う、妖艶で背筋がぞくぞくと震えるような笑顔だった。
「く……」
ハルトは右手でポケットから剣を抜いた。
背中はベッドに貼り付いているが、腕は動かすことが出来る。
このままでは、いずれ自分も正気を失う。そうしたら、世界は滅ぶ。
それだけは――、
ハルトはイリスを、そして右手に握る赤い剣――フェニックスを見つめた。
「『ヴァルカン』‼」
ハルトはその剣を、刺すように突き出す。
その切っ先に赤い魔法陣が浮かび、炎の弾丸が発射された。
その炎は、教会の最奥の祭壇に向かって走る。
祭壇の前に、立つ人影に、直撃。激しい火柱が燃え上がった。
その瞬間、ハルトの背中がベッドから剝がれた。
「イリス‼」

肩を掴んで、前後に激しく揺さぶる。
「あ……は、ハルト……くん」
正気に返ったように、目を瞬かせた。そして一瞬で茹で上がったように、顔が真っ赤に染まる。
「わ、わた……私……い、いい、いまのはっ」
「今はいい！　それより!!」
ハルトはイリスを背中に庇うようにして、燃える祭壇を見つめた。
「あの程度じゃ痛くもかゆくもねーか」
炎の中から、ゆらりと人影が現れた。
「……素晴らしい」
そうつぶやいた人影は、奇妙な仮面を付けていた。
左半分が笑顔で、右半分が怒りの表情。
まるでカーニバルの仮装で使うような派手なデザイン。目の部分には黒いガラスがはめられていて、相貌はまったく分からない。
頭からフードを被り、髪の色も分からなかった。そして喪服のような黒い衣装。
その胸には、見たことのない不気味なペンダントを下げている。逆さになった五芒の星

で、中央には目が描かれていた。
そいつはまるで感動したかのように、大袈裟に両手を広げた。
「素晴らしい!! これぞまさに転生婚礼! 『魔王』復活の時、ここに来たれり!!」
「!?」
イリスも愛用の青い剣ストレプトペリアを抜き、ハルトの横に並ぶ。
「あの男、私たちのことを……」
「ああ……どうやら、ただの大道芸人じゃねえらしいな……」
ハルトとイリスの殺気を受けてなお、その男は感動に打ち震えていた。
「祝祭! ああ、素晴らしい。ついに来るのだ! 新世界が!!」
喜びを表すその声は、どこか奇妙な響きを持っている。地声ではなく、明らかに魔法で変化させている声だった。
「おい、季節外れのお祭り野郎」
「ふふ、洒落た呼び名をありがとう。ブレイズの筆頭魔術師」
「詳しいな。ってことは元々、俺たちを狙っていたってワケか……ここに転移させたのも、テメーの仕業か」
「その通り。ベッドを用意したのも、君をベッドに釘付けにしたのもね。しかし、発情し

たのは私のせいじゃないよ。あれは君たち自身の中にあるモノの仕業だ」
「……何モンだ、テメー」
「これは申し遅れました! 私の名はサザーク。闇の魔術結社『プロスペロウ』の末端に籍を置く者にして伝道師。以後お見知りおきを」
「闇の……魔術結社だと?」
「ハルトくん、それって学長先生の言っていた……」
ハルトはアーネスト学長の険しい表情を思い出した。どうやら、勇者ギルドと仲良しというわけではなさそうだ。
「で、プロスペロウのサザークとやら。俺たちに、何の用だ」
「ははは、それはもちろん。君たちの愛を成就させるお手伝いをしに来たのですよ!」
「……な」
冷めかけたイリスの頬が、再び熱くなる。
「テメー……ふざけてんのか?」
「……は?」
サザークの頭が、かくっと傾いた。
「いま、なんて言った?」

「……ふざけんじゃねえ、っつ――」
「はぁあああああああああ!? ふざけてなんかねえよ!! マジだよ！ 大マジなんだっつーんだよ、こっちはよぉオオオオオオオ!?」
突然、サザークが絶叫した。
「ざけてんのはテメーらだろーが、クソガキどもがっぁあぁ!! こんなんふざけて出来っかってんだよコノヤロウ!! こっちはなぁあああ！ 命かけてんだよ!! 全てをかけてんだよ！ あぁあああああ!?」
急変したサザークの態度に、二人は不気味なものを感じ、思わず後ずさる。
「何だコイツ……イカレてんのか？」
ハルトがそう怪しんだとき、サザークが急に静かになった。
「――……取り乱してしまいました。謝罪します」
傾いた頭を真っ直ぐにすると、サザークはうやうやしく礼をする。
「さて、落ち着いたところで……さっそくですが、セックスして頂けませんか？」
「「……は!?」」
あまりにも想像を絶する要求に、二人は固まった。
イリスとハルトの頬が、赤く染まる。

――こ……こいつ、何を言っていやがるんだ!?
「おや？ 意味が分からない？ アレですよ、性交です。エッチです。最後までやっちゃうやつです。すなわち子作りです」
「ンなこと訊いてねえよ!! 何でテメーに言われて、そんなモンやらなきゃなんねーんだつってんだよ!!」
「ああ、もしかして勘違いなさってます？ 私はしませんよ。愛し合うあなた方二人が、するのです。愛の儀式。そう、そして愛の結晶を生み出すのです」
こいつ、マジで頭がおかしいのか？ そうハルトが呆れたとき――、
「愛の結晶……『魔王』を」
「!!」
サザークは両手を交互に回転させると、魔法陣を同時に二つ起動した。
「なーに、またちょっとイチャイチャすれば、転生婚礼で発情出来ますよ。そしたらもう、相手とつながること以外、考えられなくなります。ステキですね」
黒い魔法陣から、触手のようなムチが伸びる。
「ちっ！」
ハルトはムチを避け、床を蹴って飛び出した。その瞬間、既に魔法の準備は完了してい

る。剣に沿って指を走らせ、叫ぶ。
「『フレイム』！」
剣が炎をまとった。
「はぁっ‼」
裂帛の気合いと共に、ハルトの剣がサザークの体を斬り付ける。
金属音が響き、火の粉が舞った。
いつの間に抜刀したのか、サザークの手にも剣が握られている。
「剣の腕も素晴らしい。『魔王』の仮住まいには、相応しいですね」
「ちっ！」
ハルトがサザークの剣を弾き、一歩下がる。
追い打ちをかけようとサザークが前に出たとき、ハルトを飛び越え、イリスが宙に舞った。
「『フロスト』‼」
イリスの剣が冷気をまとい、青い剣身に霜が降りる。
空中で踊るように体を回転させ、その勢いを乗せてイリスが剣を走らせた。
白い軌跡が美しい曲線を描く。

サザークの脳天で鈍い音が響き、剣と剣がぶつかった。
イリスの必殺の一撃を受け、サザークの動きが止まる。
「『ヴァルカン』‼」
この隙にハルトが剣を振り抜き、炎を撃ち出す。
サザークはイリスの剣をいなすように弾くと、瞬間的に物質移動の魔法を起動。自分の体を大きく後ろへ飛び退かせた。
しかしハルトもその動きを読んでいる。
ヴァルカンを続けて放ち、サザークが着地する場所を狙って着弾させた。
炎の爆発が起こり、火柱が立つ。
ハルトは不敵な笑みを浮かべ、その炎を見つめた。
「ただのお祭り野郎かと思ったが、やるじゃねえか」
炎の中から、サザークが姿を現した。
その前に浮かぶのは、黒い魔法陣。
「……闇属性の防御魔法か」
「ええ。我々プロスペロウは、偉大なる指導者よりこの力……魔王の魂を授かりました」
「なに？」

――魔王の魂、だと？

魔王は半身となり、俺とイリスの中にいる。それなのに？

「……どうやら、テメーには訊くことが色々ありそうだな」

炎が消えると、闇の防御魔法も姿を消す。そしてサザークは、体の前で両手をゆっくりと回転させた。

新たな魔法陣が描かれる。一瞬置いて、それは教会の天井に付きそうなほど広がった。

――でかい。

「来たれり！　ネロ・ベヒーモス‼」

巨大な魔法陣から、その大きさに見合った北方魔族が出現する。

全高はゆうに五メートル。体の長さは十メートルを楽に超える。姿を形容するなら、異常に筋肉が発達した、肉食の巨牛。

顔は大きく、口には鋭い牙が百本以上も並んでいる。顔の側面から、岩をも砕きそうな巨大なツノが二本、前に突き出ていた。

漆黒の体は、岩のような筋肉の鎧に覆われ、その体に秘めた破壊力を伝えている。

危険レベル12。ベヒーモス種の中でも、特に凶暴な奴だ。

「大した召喚魔法だけどな、幻じゃ俺は倒せないぜ」

「ふふふ、本物の召喚魔法は、幻などではありませんよ」

ベヒーモスが向かって来た。

巨体が踏みならす足音は、地震のように教会を揺らす。まるで、本当に実在しているかのような――⁉

「イリス！　教会を出るぞ！」

ハルトとイリスはネロ・ベヒーモスに背を向け、出口へ走る。

扉を蹴破り、外へ飛び出した。

目の前は草原で、遠くに森と山が見える。

その風景から察するに、ここは討伐競技会のフィールドからそれほど離れていない。

しかし、のんびりと検証している余裕はなかった。

背後の教会の前面が、爆発したように吹き飛んだ。

その中から、ネロ・ベヒーモスが突進してくる。

二人との距離が、みるみる近づき――、

「ハルトくん！」

「おう！『ムーブメント』‼」

二人はネロ・ベヒーモスをギリギリまで引きつけてから、左右に分かれる。

移動魔法を使い、体を真横へ飛ばす。その速度は足で走るより、はるかに速い。
ハルトとイリスの間を、ネロ・ベヒーモスが地響きと共に通り過ぎた。その震動は、まるで地震だ。
ネロ・ベヒーモスは、しばらく行ってから向きを変える。そして、二人を威嚇するように咆哮を上げた。
通り過ぎた地面は、草が踏み固められて凹み、ハッキリ足跡が残っている。
「ハルトくん……あれ、実体です……」
遠くから笑い声が聞こえた。
「ははは！　これぞ闇の魔法の深淵!!　闇の魔法こそ奇跡！」
倒壊し、瓦礫の山と化した教会の上で、サザークが語る。
「これが本物の召喚魔法です！　勇者ギルドのまがい物とはひと味もふた味も違いますよ！　魔王の魂でこそ成し得る魔王の奇跡！　その体に刻むといい！」
「ワケのわかんねーこと言ってんじゃねーぞ！　その魔王の魂ってのは、何だ!?」
サザークはわざとらしく、口元を押さえるような仕草をした。
「少し喋りすぎましたね。あなた方は少しやんちゃが過ぎます。運びやすいよう、腕の二、三本でもネロ・ベヒーモスに喰わせてから連れて行くとしましょう」

サザークが指を鳴らすと、ネロ・ベヒーモスが再び二人に襲いかかった。
「ハルトくん、どうしますか？　逃げるだけなら簡単そうですが……」
「いや、あのサザークってヤローをとっ捕まえて、吐かせたいことがある。ネロ・ベヒーモスは俺が殺る」
「でしたら、私が動きを止めます」
イリスはネロ・ベヒーモスに、剣の切っ先を向ける。
「気を付けろよ、イリス。お前が危ない目に遭ったら、集中出来ねえからな」
「――そんなに、私が信用出来ませんか？」
「そうじゃねえ。お前には傷一つ付けたくないだけだ」
「……」
イリスの方が集中出来なくなりそうだった。
もうっ……こんなときに、ハルトくんったら！♡
自分のことを大切に思ってくれている気持ちが伝わり、頬は熱く、動悸も激しくなる。
イリスは頬の熱を冷ますように、両手で押さえた。
集中しないと魔法式は上手く作れない。それは、頭の中で思考することにより作られるものだからだ。

体の中から生み出される魔力は燃料。魔法式は、その燃料を利用する機械のようなもの。精神力で作った設計図――すなわち魔法式に沿って魔力を流すことで、魔法は起動する。

そして魔力を生み出す方法は、それぞれ異なる。

魔神と呼ばれる存在と契約を結ぶことであったり、光の神を信仰することで神の奇跡を利用することであったりと様々だ。

イリスの場合は氷の精霊と、そして体の中に潜む『魔王の半身』。

史上最強の魔力の供給元である。

ハルトとイチャついたおかげで、今は魔王の半身が潜む扉が少し開き、強大な魔力が流れ出ている。

「『フリージング』!!」

剣の先に魔法陣が展開し、そこから白い煙を上げ、冷気の塊が発射された。

甲高い金属音のような音が響き、噴き出した煙が地面の草を凍らせる。

そして、発射された冷気の弾丸はネロ・ベヒーモスの体を冷却し、体を覆う毛が白い霜で覆われてゆく。

動きの鈍ったネロ・ベヒーモスに向かって、イリスが駆けた。

「『フロスト』!!」

ネロ・ベヒーモスの太い足を斬り付ける。抜群の防御力に阻まれ深手は負わせられない。

しかし、叩き付けた冷気が足を地面に凍り付かせる。

その間、ハルトは炎の上級魔法に必要な呪文を詠唱していた。

「――炎の精霊、火炎の魔神、我は求め訴える」

ハルトの周りに熱気が渦巻き、突風が吹き荒れた。

「――爆炎、烈火、灼熱、業火、形あるものを灰に、形なきものを塵に」

ネロ・ベヒーモスの足下に、真っ赤に燃える魔法陣が出現する。

それが炎の地獄への入り口。

「『メルトダウン』!!」

真っ赤な閃光が天に向かって伸びる。

それはまるで火山の噴火か、噴き上がった溶鉱炉。

ネロ・ベヒーモスの断末魔の叫び声が響き渡った。

魔法耐性のあるはずの毛皮も、どんな攻撃も跳ね返すはずの岩のような肉体も、まったく役に立たない。

暴力そのものの炎と熱が、容赦なくその身を焼いた。

メルトダウンの柱は徐々に細くなり、やがて一本の線となって、消えた。

その跡には、何も残っていない。
そこに存在したはずのネロ・ベヒーモスは跡形もなかった。
場違いに呑気な拍手が響く。
「これはこれは！　見事なものですね。炎の上級魔法を見たのは久しぶりです。しかし、これほど強力なものは見たことがない！　まさかネロ・ベヒーモスを一撃とは！　さすがは魔王の半身をその身に宿す者!!」
大はしゃぎで手を叩くサザークに、ハルトは険呑な目つきを向ける。
「次は、テメーの番だぜ」
「いやいや、楽しみは取っておきましょう。ただ、誤解して頂きたくないのは、我々はあなた方の味方だということです」
「ふざけないで！　襲撃して来て、何が味方よ！」
「ふざけ……？」
サザークの首が、かくっと傾いた。
「ンアァアあああっ!?　っざけてねーよ!!　ざけんじゃねーよ!!　あぁアぁあァ!?　何でこっちの気持ちがわかんねーんだよ!?　……失礼、取り乱しました。謝罪します」
ハルトは眉を寄せて、サザークを睨む。

「あのヤロウ……どこまでがマジなんだ」
サザークの首が真っ直ぐに戻った。
「ははは、マジですよ。全て、まるっとオール・パーフェクト・マジ。我々はあなた方の愛の成就、幸せを願っているのです」
イリスの目が鋭く絞られる。
「……幸せ、ですって？」
「詳しくはまたの機会に。では、お二人が結ばれる未来を祈って!!」
サザークの足下で魔法陣が光った。
「くっ!!」
咄嗟に投げたハルトの剣が、地面に突き刺さる。
しかし、その時には既に、サザークの姿は消えていた。
「転移魔法か……用意のいい奴だ」
サザークの消えた辺りを足で探ると、黒く光る丸い石が見つかった。
宝石のようにきれいな石だったが、ヒビが入り、今にも砕けそうだ。
イリスもやって来て、その石を覗き込む。
「魔法石ですか……これにあらかじめ転移の魔法式を仕込んでいたのですね」

「ああ。だから何の予兆もなく、突然魔法を起動させていたんだ。俺たちがここに連れて来られたのも、恐らく同じだろう」
ハルトが地面に刺さった剣を抜いた時、ちょうど魔法石も砕けて消滅した。
「ハルトくん……あの男は、一体何者なんでしょう？」
「さあな……だが、俺たちのことを知っている。そして、俺たちが知らないこともな」
「では……ハルトくん」
「ああ。奴をとっ捕まえる。奴が口走った、魔王の魂ってのも気になるしな」
「でも、どうやって探したら……」
「それはこれから考える」
イリスは困ったような笑みを浮かべた。
「良い方法が思い付くと、いいのですけど」
「楽勝だ」
――と、そのとき、
聞き覚えのある声に呼び掛けられた。
「あれ？　そこにいるのは、ハルトさんとイリスさん!?」
聞き覚えのある声がした。

草原を渡ってやって来るのは、ルミナスの錫杖を持つ幼い少女。
「クララ!?　お前こそ、何でこんなところに」
「私はここに古いルミナスの教会があると聞いて……せっかくブレイズ領に来たので、見学をしてから帰ろうかと思ったのです」
「帰る……って、討伐競技会はどうなったの？」
「はい？　とっくに終わったのです。我がルミナスが一位、二位は同率でブレイズとアブソリュートなのです」
「……」
まずい。
一体、何て言い訳したらいいのだろうかと、二人は冷や汗をかいた。
「それよりも、お二人はどうしてこんなところに？」
「あー……」
「そ、それは……」
クララは、ぽんと手を打った。
「分かったのです！」
ハルトとイリスの心臓が、どきりと跳ね上がり――、

「お二人も古い教会に興味があるのですね!?」
——脱力するように着地した。
「あ、ああ……まあ、そんなところだ」
やむを得ず話を合わせるハルトに、クララは目を輝かせた。
「そうなのです！　そうなのです！　ブレイズにおける古いルミナス建築としては、他になかなか例のない貴重なものらしいのです！　これは絶対に見ておかなければ、そう思うのも当然なのです!!」
クララはわくわくした目で、辺りを見回した。
「この辺りにあるはずなのです。でも見当たらないのです？」
近くにある瓦礫の山がそうだとは、二人はなかなか言い出せなかった。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！
©Masamune Kuji, Miyama-Zero 2020